国際交流レター Vol.19

INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

熊本学園大学国際交流委員会

CONTENTS

国際交流レター　VOL.19

巻頭言……学長　角松正雄　1
姉妹校学長挨拶
……モンタナ大学学長　ジョージ　M.デニスン　2
……キャロル大学学長　マシュー　J.クィン　3
……深圳大学学長　謝維信　4

トピックス
待望の国際交流会館建築始まる！……5
震災後の甲南大学からの研修団受入れ再会……6
寄稿……7
ドイツからの短期留学生ペーター・ベラネク君
卓球で大活躍！……8
日韓学生交流計画による訪韓メンバーを派遣……8
第6回外国人留学生弁論大会……8

教員交流
いっしょに暮らす社会……慶益秀　10
私の Montana life ……井上勝子　11
大田大学校と大田広域市の勢い……大塚信生　12
深圳の窓－中国らしさの光と影－……吉永心一　13
交換教員往来……14

学生交流
〈研修団〉
第2回大田大学校夏期学生研修団来学……15
モンタナ紀行 '96夏……林日出男　15
「交流は口を開くことから」……木下徹弘　17
深圳訪問を終えて……蔡剣波　18
1996年度経済学部「外国事情研修」を終えて……慶田收　20
1996年度英米学科第1回目の海外研修を終えて……堀正広　20
1996年度東アジア学科「海外研修」を終えて……服部昌之　21
〈留学体験記（派遣）〉
アメリカ留学体験記……田辺順子　22
2つの世界を広げてくれたイギリス留学……佐藤伸洋　22
フランス留学を終えて……上村朋子　23
1年間留学して感じたこと……早川愛　24
隣の国「韓国」……渡邊照男　25
〈留学生のこえ（受入れ）〉
English in Japan : Everywhere & Nowhere
……スコット・パイカーチャク　26
北から九州まで……ジルケ・ドヤリング
アネッテ・ディーツ　26
日本に留学して……李羊宿　27
託麻祭を振り返って……郭学雷　28
肥後銀行徒然寮での生活についての感想……何成雨　29
〈国際交流スナップ〉……30

DATA
1996年度国際交流 EVENTS ……32
1996年度出身国（地域）別外国人留学生数……34
1996年度留学生名簿……34
本学留学生への交流の主な案内……35
1996年度・本学留学生の奨学金受給実績……36
国際交流センター事務室主催
交換教員による教職員向け語学講座……36
国際交流委員会メンバー……36
国際交流センター事務室スタッフ……36

巻頭言

『国際交流の新たな意義』

熊本学園大学学長
角　松　正　雄

平成９年１月25日、橋本龍太郎首相と韓国の金泳三大統領は、大分県別府市で会談している。日韓関係が、従軍慰安婦問題に代表される「過去」問題や竹島の領有権問題など、国家レベルの懸案が簡単に解決できず、とかくぎくしゃくしがちな関係にあった中での首脳会談であり、多くの期待が寄せられたことはいうまでもない。

新聞の報ずるところによると、北朝鮮情勢や対北政策などについて、両首脳間で「非常に突っこんだ話し合い」が行われた。また、両首脳は南北朝鮮と米中両国が参加する四カ国会談の早期実現や朝鮮半島エネルギー開発機構（KEDO）の事業円滑化などを目指して、米国を加えた三カ国が緊密に協力していくことで一致したという。

同ニュースを読んで次の記事が印象的であった。両首脳会談後の記者会見で、橋本首相がのべた言葉が紹介されている。「両国間で人と人との触れ合いによる交流が行われ、相互理解が深まることこそが、未来に向けた日韓関係発展のため重要であることを確認した」という発言である。ごく当然のことと受けとめられるこの言葉も今回はいろいろ考えさせられるものがある。

これまで日韓の「未来志向」は1980年代半ば以降、首脳会談のたびに、強調されてきた。しかし、国家というシステムを通すとその「理解」がなかなか進まない時期にあったと思う。その打開の途は、「ノーネクタイの会談」という形で象徴的に示されている。

一部の勢力を除き、日韓両国民は、互いのわだかまりを率直にぶっつけ合い、「過去」の問題を腹蔵なく語り合うことができるだろう。また、そのような努力を積み重ねるであろう。したがって、それぞれの国民を信じ、国民レベルの信頼を広げることを期待する言葉と受けとめている。

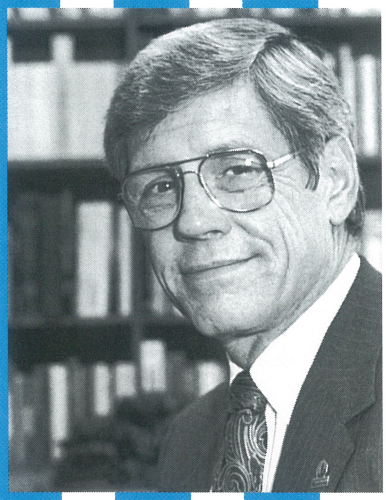
遠い歴史の過去に溯るまでもなく、現在でも日韓両国民の往来ははげしい。昨年その数は実に260万人に達している。とくに九州や韓国南部などを中心に交流の輪が拡がっている。かねがね私は国際化は、1960年代のモノ中心、1970年代のカネ中心から、1980年代はヒト中心に進展してきていることを述べてきた。さらに国際交流は、国家よりも、その壁を乗り越えた形での、都市、あるいは地域の交流が拡がり、国民、あるいは市民レベルの交流の段階に入っていると述べてきた。

真の国際交流は、それぞれの社会の文化の差異を理解し合い、尊重し合い、その差異を超えて相互の信頼をつくっていく、市民レベルの交流に根ざすものであると考えている。大学間の国際交流は、重要な交流の一つとして、新しい意義をになわされているのではないだろうか。

国際交流委員会では、これまでの国際交流のあゆみを反省し、今後の展開と課題を提起すべく全力が注がれている。

学園の全知がそこに結集されることを願っている。本年度中に学園全体が待望していた国際交流会館が完成される。新しい国際交流の場としてその活用を期待したい。

The University of Montana



With great pleasure, I welcome the opportunity to extend greetings on behalf of The University of Montana to the scholars, staff, and students of Kumamoto Gakuen University. On the occasion of the fifteenth anniversary of our sister school affiliation, I know well that our institution has benefited greatly from this partnership. Uniformly, the faculty and students of The University of Montana who have participated have commented positively on the value of their experience. Without exception, they have commended the quality of Kumamoto Gakuen's academic programs and spoken warmly of the friendships they have made and the hospitality extended to them.

As our two countries stand upon the threshold of a global century, I think it even more important than ever that we continue to build bridges between our societies. The sister relationship between the State of Montana and the Prefecture of Kumamoto, initiated through the efforts of Ambassador Mike Mansfield, and the partnership between our two Universities represent the building blocks of international understanding and collaboration which provide the foundation for success in a global society. We look forward eagerly to the growth and maturation of our collaboration.

The faculty of The University of Montana recognize that our students will work and live in a world much different from the one they knew as young people. In a world of instantaneous communication and high technology, we believe that citizens will increasingly choose to pursue their lives under democratic self-governance within the free market. However, despite this emerging convergence among peoples in the ways they govern themselves and conduct business, the peoples of the world will remain enormously diverse in culture, language, and beliefs. We think this an important value to preserve. In response, University education must help to prepare people for life and work in a diverse world. This means that language and international studies coupled with the development of a global perspective will become a necessity rather than a luxury. It means as well that we will have to find new ways to enable our faculty and students to experience directly other cultures for themselves.

By all indications, international economic development will become decreasingly dependent upon physical infrastructure and increasingly reliant upon human capital. Thus, for our societies to remain successful and competitive in the global era, our citizens will require a rich education throughout the life cycle. Moreover, as all business becomes international business, the education of our citizens must reflect the international context. As the economies of nations become more entwined, so, too, must our citizens emerge from the isolation of the past. The partnership of our two Universities and, indeed, the unique alliance of our two nations--an alliance Ambassador Mansfield characterized as the "most important bilateral relationship in the world, bar none"--together narrow the expanse of the Pacific Ocean and bring our scholars and young people together to shape the next century.

As we acknowledge and celebrate the success of our fifteen-year partnership, so must we recommit ourselves to its continuation. Montanans welcome this opportunity and anticipate that our partnership will help us to realize a global vision for higher education.

George M. Dennison

George M. Dennison, President
The University of Montana

熊本学園大学の教職員ならびに学生諸君に対し、モンタナ大学を代表して御挨拶を申し上げます。両大学の姉妹大学提携も15周年を迎え、モンタナ大学の教授陣および学生一同は貴大学と共に築き上げた友好関係ならびに私どもが受けたもてなしの大切さを認識しています。

21世紀を目前にして、両国の友好関係にこれからもさらに橋を架け続けることがなお一層重要になるものと考えています。そこでモンタナ州と熊本県との姉妹関係ならびに両大学の協力関係が国際理解と国際協力のいわば、ブロックとなり、地球的規模での交流を成功させる為の土台となってくれることでしょう。

これからの市民たちは、瞬時の交信が可能で高度の科学技術の恩恵に浴する世界に住み、自由経済市場の中で民主的な自治を進めていくような生活を選び取るようになるでしょう。それでも、世界各国の文化面、言語面、信条面での違いはこれからも続くでしょうから、そのような多様性を持つ世界で人々が生活し、働けるように、大学教育が援助の手を差し伸べていかなくてはなりません。

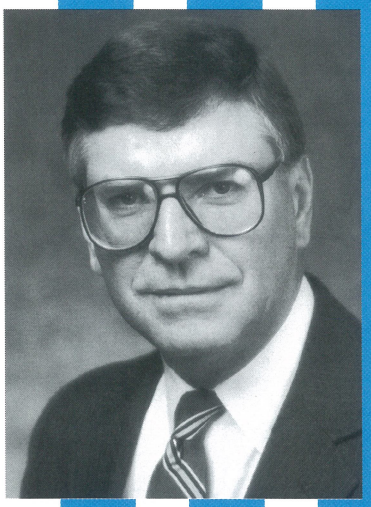
これからの国際経済の伸展は下部構造への依存度が低下し、人的資本への依存度が高まるので、市民たちは生涯に亘って、内容豊かな教育を受けていかなくてはなりません。しかもその教育は国際的状況を理解できるものでなくてはなりません。そのために両大学の協力関係と日米両国の同盟関係が一体となって、太平洋の広大な空間を狭め、教授陣ならびに学生一同の結束を図り、21世紀作りに邁進したいものです。

15年間に亘る両大学の協力関係は成功を収めてまいりましたが、今後もこの協力関係が成功裡に継続することを祈念すると同時に、地球的ビジョンを備えた高等教育の実現にも役立つことを願っています。

モンタナ大学学長
ジョージ　M. デニスン

CARROLL COLLEGE

"Not for School but for Life"



We at Carroll Collage are proud of our International Program and the talented students who travel from around the world to share their ideas and friendship with us. We are especially proud of our 15-year sister school relationship with Kumamoto Gakuen University and the students who have contributed to such valuable exchange.

Those students who have traveled from Kumamoto Gakuen University will attest to the quality of their experiences at Carroll, and our students have also been enriched by their associations with Kumamoto Gakuen students as scholars, as mentors, and as friends.

In this spirit we invite the students and faculty of Kumamoto Gakuen University to continue in this tradition of exchange high in the heart of Montana's Rocky Mountains. Carroll offers students an opportunity to live and to learn in one of America's most spectacular natural havens; to explore the similarities and differences they share with the people of Montana; and to strengthen their understanding of themselves and their world. Please contact a member of Carroll's International Program or your Kumamoto Gakuen representative if you would like to share in this unique educational experience.

Whether you visit us as a student, ambassador, or friend, be assured that we at Carroll are committed to building upon our long relationship with Kumamoto Gakuen University and the best qualities of our friendship, not just for school, but for life.

With best wishes,

Matthew J. Quinn

Matthew J. Quinn, Ph.D., J.D.
President of Carroll College

キャロル大学は、世界中の大学と交流プログラムを持っておりますが、特に15年に及ぶ熊本学園大学との姉妹関係は、私たちの誇りとするものであります。熊本学園大学からの留学生はこちらでの生活を十分に楽しみ、また本学の学生は、彼等から多くのことを学んでおります。

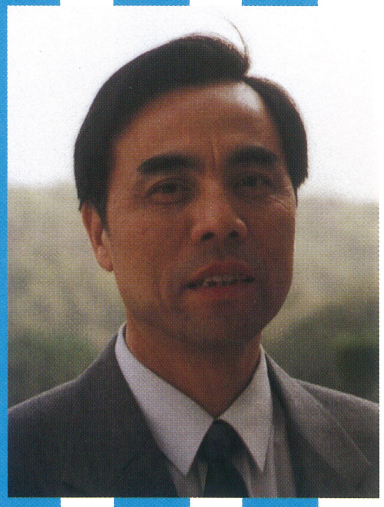
キャロル大学は、ロッキーの山々に囲まれた、アメリカでも最も自然に恵まれた環境にあり、このような土地でモンタナの人達と文化交流を行い、自らの視野を広げる経験を留学生に是非して欲しいと、私たちは考えております。キャロル大学の国際交流事務局、あるいは学園大学の国際交流センターが窓口として相談に乗ってくれますので、連絡を取ってみてください。

私たちは、熊本学園大学との友好関係を、今後とも更に充実していきたいと考えております。

キャロル大学学長
マシュー　J.クィン

深圳大学

十年交流历程回顾



１９８７年１２月１９日，贵我两校在熊本郑重地签署校际交流协议，并正式结为姐妹大学。从这一天起，贵我两校像姐妹一样携手合作，共同走过了十年历程。在即将迎来结好十周年之际，我谨代表深圳大学对两校成功的合作表示诚挚的祝贺，对在两校交流事业中作出贡献和给予支持的各位老师和同学表示衷心的感谢。

十年，在漫漫的历史长河中是短暂的，但贵我两校的合作是真诚的，友谊是牢不可破的。由于双方的努力，十年硕果累累，主要有以下四个方面：１、两校通过交换教员项目，先后分别派出８位和４位教师到对方大学讲学和从事研究；２、两校通过交换学生项目，先后分别派出２０位和２２位学生到对方大学学习；３、双方连续十年每年在深圳或熊本就最感兴趣的经济、文化和其他方面的问题进行合作科研；４、两校广泛开展学生之间的交流，我校先后接受多批贵校派遣的学生校际访深团和以班组团的学生访深团以及短期专业进修团。交流增进了两校师生的互相了解，加深了学生对异国文化的理解，合作促进了两校的教学和科研工作的发展，推进了两校跨世纪国际化人材培养的进程。

十年，即将过去，友好合作的十年是我们今后进一步扩大交流的基础。我们期待着今后能有更多的教师和学生到对方大学讲学和学习，也期待着双方能共同出更多更高水平的研究成果。

回顾过去，展望未来，任重而道远，让我们共创辉煌的明天。

深圳大学校长　謝維信

十年間の交流をふり返って

1987年12月19日、貴学とわが大学とは熊本において大学間の交流協定に署名し、正式に姉妹大学となりました。その日から、両大学は兄弟の如く手を携えて協力し合い、共に十年の歴史を歩んでまいりました。

姉妹提携締結十周年を迎えるにあたり、私は深圳大学を代表して、両大学の協力関係の発展に深い喜びを表すとともに、両大学の国際交流事業の中で大きな役割を果たされ、支持して下さった各先生方並びに学生の皆さんに衷心より感謝致します。

十年というのは、長い歴史の大河の中においてはほんの短いものではありますが、しかし、貴学とわが大学の交流の十年は非常に誠実な十年であり、その友情はまことに堅固なものとなったのであります。

双方の努力によるこの十年の成果には目を見張るものがあります。その主なものは以下の四項目に分けられると思います。

1．交換教員プログラムにより、それぞれ８名と４名の教員が相互に派遣され、教育と研究にたずさわってきたこと。

2．交換学生プログラムにより、それぞれ20名と22名の学生が相互に派遣され、それぞれの大学で学習する機会を得たこと。

3．毎年相互に深圳と熊本の地において、双方に関心の高い、経済・文化・その他の方面に関する共同研究を行い、大きな成果をあげたこと。

4．両大学が広範な学生間の交流を推進してきたこと。わが大学について言えば、この十年間、貴学の正式の学生訪問団、多くのゼミ訪問団、及び短期の語学研修生等を受け入れてまいりました。

これらの交流は両大学の教員・学生の相互理解を深め、学生の異文化に対する理解を深めるのに大いに役立ちました。又、両大学間の協力関係は双方の教学と研究を大いに発展させ、両大学の二十一世紀へ向けての国際化を目指す人材育成を強力に推しすすめてまいりました。

十年は間もなく過ぎ去りますが、友好協力のこの十年は、我々の今後の更なる交流拡大の土台となる十年でありました。我々は今後も更に多くの教員・学生がお互いの大学を訪れて、互いに教え、学び合うことを希望いたします。又、両大学が共に協力し合い更に高度な研究成果をあげ得ますよう期待しております。

過去をふり返りつつ、未来に目を向け、共に手を携えて、輝かしい明日を創造して行こうではありませんか。

深圳大学長　謝　維　信

トピックス

待望の国際交流会館建築始まる！

学園創立50周年記念事業として平成９年度に国際交流会館建築が計画された。その経緯を見るに、本学の創設から今日までの発展の歴史と強い因果関係がうかがえる。そのベースとなる世界を志向する精神は50年以上にわたって脈々と受け継がれている。常に地域と日本、そして世界を結んで考え、広い視野を涵養している訳だ。

現在約70名の外国人留学生が本学で学び、毎年、約400名に及ぶ本学の学生が長期留学・短期留学・海外研修の諸制度で海外を訪問し、語学研修・異文化体験等の国際交流にチャレンジしている。この様な背景のなかで、国際交流会館の設置が提案され、実現されようとしている。

本学国際交流委員会は、会館設置に関する提言のなかで次のように〈設置目的〉をとらえている。

「留学生がより快適な居住環境の下で勉学・異文化理解に専念し、学生同志や地域住民との交流を深めることによって、熊本と諸外国との友好をより深く促進し、もって本学が目指す『国際化』を更に推進すること」

〈入居対象者〉は交換留学生を中心に考えているが、本学の日本人学生から選抜されたインターナショナルルームメイトとの混住生活を過ごすことになる。留学生と日本人学生との混住生活では、国際交流・国際理解の尚一層の推進を意図している。

〈施設〉は３人グループのユニット方式の居室をベースにしたものでベッド・学習机・ロッカーはそれぞれの個室に配置し、リビング・洗面所・トイレ・シャワーを共同で利用することになる。

また１階には和・洋の集会室、共同のキッチン・談話室も設け、学生同志の、あるいは学生と市民との自由な交流が企画運営されるスペースとなっている。本学が推進するバリアフリーの理念は当会館の諸設備にも十分に施され、もちろん、身障者用のユニット居室やトイレなども完備している。

具体的な〈運営〉については今後関係者が知恵を絞ることになるが、アドバイザー兼務のチーフスタッフが昼間の運営の責任者として学生達のお世話をし、夜間は入居者の安全、建物の保全を確保する面から、管理会社への業務委託が検討されることになろう。

ハードに恥じないソフトを具現化することで本学の国際交流・国際理解教育が量から質へ大きく歩みだすことを思う時、胸の高鳴りを感じる。大学関係者はもとより、関係諸氏のご支援を切にお願いしたい。

会館建築に向けた関係者のご尽力・ご配慮に心から感謝を申し上げたい。

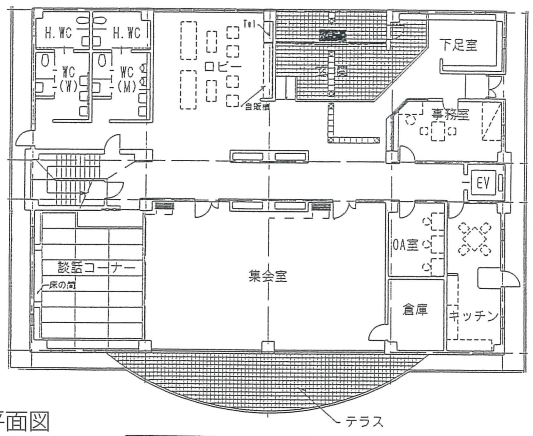
（建築工事は平成９年４月１日～平成10年１月31日の予定）

国際交流会館完成予想図

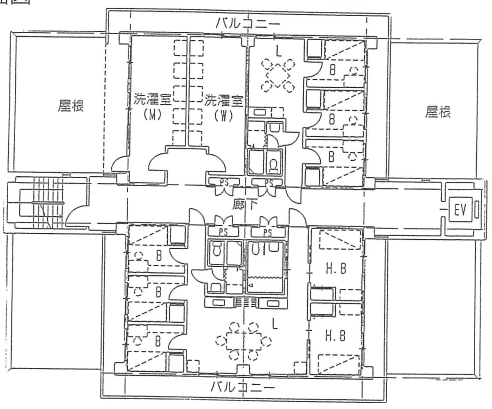
トピックス

国際交流会館

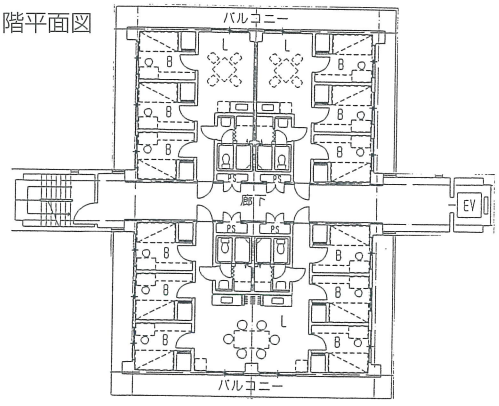
1階平面図



2階平面図



3・4階平面図



震災後の甲南大学からの研修団受入れ再開！

春の新入生歓迎ピクニックに合わせた甲南大学（神戸市）からの留学生研修団受入れも既に５回を数え毎年の恒例となっていた。平成７年（1995年）の４月に予定された６回目の受入れに向けて、既に11月から甲南大学と書簡のやり取りを始めていた。しかし、それは１月17日のあの阪神大震災により実現されなかった。甲南大学では、当時36名を数える留学生が奇跡的にも全員無事であったことは不幸中の幸いだった。とは言え、あの混乱の中で学生の無事を確かめ、また、それをそれぞれの国の大学へ知らせ、全員をとにかく無事本国へ帰国させるという作業は大変なことであったに違いない。更に、校舎の60％が全壊し交通網が寸断され、余震の続く危険な状況の下では、今後２年間留学生受入れはストップせざるを得ないと大学当局は判断した。ところが、大学当局のその決定は、「キャンパスに留学生の姿がないのは淋しい」という日本人学生達の意見や「こういう時こそ神戸で学ばせたい。是が非でもプログラムの再開を」と海外の協定校から励まされ、プレハブ仮設校舎の立ち並ぶキャンパスに、同年秋には５名、そして翌年１月には更に13名の留学生を受け入れて、平成８年（1996年）４月には例年より少ない計14名の留学生研修団が本学に来学。２年ぶりの受入れとなった。その学生達の送別会に翌５月甲南大学を訪問させていただいたが、所狭しとプレハブ校舎の立ち並ぶキャンパスの中で復興へ向け着々と新築工事が行われていた。そしてそこで出会った皆さんの明るさ、優しさに人間の強さを感じた。平成９年（1997年）４月には、また22名の留学生研修団を迎える予定である。

８年度　甲南大学留学生研修団と本学の学生たち
（新入生歓迎ピクニックで　４月18日）

甲南大学では平成９年（1997年）３月24日に震災復興校舎竣工披露を挙行された。

トピックス

寄稿

実に活気に充ちた留学生

甲南大学留学生研修団
Host Mother　植　田　幸　子

緊張して、迎えに行ったのが嘘のように、我が家に訪れた「雪儀」は、何年も前からおつき合いをしてきたような人でした。黒髪の愛くるしい瞳のせいか、他国人であるという違和感が少しも感じられない。国が違うとか、人種が違うとか、初対面だとか、年齢が違うとか、全てを超えた、とてもいい出会いだったように思う。

一日目は、生憎、あんなにホストファミリーを切望した当の娘は、アルバイトで十時過ぎまで不在。主人と私の三人で食事。食卓には、私が出かける前に作った料理が既に冷えていた。が、彼女は厭な素振りは少しも見せず、にこにこと箸を運ぶ、私はほっとする。「わたし、たべる！」と張り切って買った馬刺も、どうやら彼女の舌にあったようで、これも一安心。娘のバイトが終わる頃、一緒に迎えに行き、熊本市内の夜の観光ドライブ。ネオン街を抜け、江津湖を抜け、東バイパスを走る。車内では、彼女はひっきりなしに日本語をしゃべっている。日本語をしゃべることに少しのてらいも屈託もない。ただしゃべることが楽しくてたまらないという様子である。

二日目、留学生と学園大生は阿蘇への一日遠足に行ったが、夕方帰ってきた時、妙に張り切っていた。若々しい探求心に満ちたその目が、さらに生き生きと輝いている。そして言った言葉が「わたし、パチンコ　いく！」突然何を言い出すのかと、ビックリして娘に聞くと、阿蘇から帰るバスの中からパチンコ店の建物を見た。「あれは何か」と、尋ねるからパチンコだと教えた、ついでにどんなものかと説明したら、張り切りすぎてしまったと。女の子二人だけで行くというわけには行かないから、お父さんに連れていって貰いなさいというと、主人の会社に電話をし始めた。「わたし、シューイーです、うえださんおねがいします」と言っている。「おとさん、わたし　パチンコしたいです、わたしをパチンコにつれていってください、はやくかえってきてください！　おねがいします」と言っている。そのひたむきさは、我が子と思うぐらい可愛い。出かける前に食事をする。「腹が減っては戦ができぬ」という言葉が日本にはあると、拙い英語で必死に伝えようとするが、解ったのか解らないのか、判らない。とにかく、「わたし、かつ！」と、二の腕を高く突き出して、闘志満々出かけていった。頑張って！と送り出してはみたものの、気が気ではない。そして約三十分後頃か、まず、主人から第一報が入る。どうやら、うまくいっているらしい。ちょっと安心。次に、雪儀から「わたし　かつ！」と嬉しそうな弾んだ声で第二報、そしてまた主人から「ばんばん出しよる。」と第三報。私もやっと胸を撫で下ろす。そして一時間後ぐらいか、満面笑顔で帰ってきた。雪儀曰く、「おかさんの、はらが・・？・うーん？・・がよかった」と。私の言いたいことはどうやら解っていたらしい。四人で勝利を喜び合う。彼女は、熊本滞在後長崎を訪ねる予定だったが、予約していたユースホステルの宿泊代二千五百円には余るほどの大勝利だったらしく、「わたし、もっといいところ　たのむ、よかった」と素直な喜びようであった。その後、今度は一日の疲れを取ろうと温泉に行った。彼女が気に入るかどうか心配だったが、いろんな種類の浴槽を行ったり来たり大丈夫のようだった。夜中十二時頃、「たんのしかった」と言って、やっと彼女の長い一日が終わった。

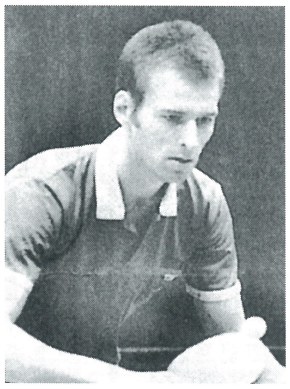
三日目は、娘は授業で、雪儀は留学生みんなと市内見物だった。夕方には、学園大学で待ち合わせて、その夜予定の、娘のサークルのコンパに一緒に行った。その夜はとても盛り上がったそうで、サークルのみんなと十分打ち解けて、話も弾んだと言っていた。友達と別れ難かったようで、一晩中話していたいからと、電話があったが、主人の許可はおりず、夜中遅い帰宅となった。

だが、それは正解で、翌朝は朝の集合時間にやっと間に合う状態だった。学園大学の玄関前には、既に、全員集合してそれぞれに別れを惜しんでいる。短い出会いと感動の中で、あっという間に別れの時が来たという感じで、まだまだ出会いの実感の方が生々しく、別れの実感など湧きそうもない。娘は熊本駅までついていくというので車で追いかけた。

ホストファミリーは、学園大学のは初めてだが、それ以外は何度か経験した。その経験と雪儀のホームステイの場合を考え併せると、彼女の取り組み方は実に爽快で積極的で、我々に気配りまでみせる快適なものだった。例年のホームステイヤーは、ご飯は食べない、味噌汁は手を付けない、箸は持とうとしない、言葉が通じずじれったいのは解るが、あまり会話を楽しもうとしない。そして、ホームステイしているにも関わらず、友達同士で、他のホームステイ先に電話し合って会話する。内にこもって、自分たちのライフスタイルの他は、あまり興味を持とうとしなかった。受動的なうえ、自分の責務以外には、目を向けようとしないので、気を使うことが多く、私としては少々不満でもあり、苦でもあった。しかし今回の若者達のように、親交を深めるとか、何かを学ぶとか、それぞれが主体的な目的をもって、自らで日本を選び、日本に必要性を求めてきたものであれば、こんなにホストファミリーも楽しいものだということが初めてわかった。雪儀は、実に能動的で、利発で、探求心に満ちた清々しさをもっていた。出された食事はたぶん食べたくないものもあったと思うが、残すことなく、しかも気分良く食べ、自分のことは自分でやり、甘えすぎることなく、程良く親密に、そして今の日本の若者にも欲しいけじめ（世界に通用するマナー）も、彼女はちゃんともっていた。私は久しぶりに、世界を舞台に活躍しようとする、本当の希望に充ちた若者に出会ったような気がした。絵や音楽やスポーツから心の栄養をもらったような、いい気分に充たされた。彼女は彼女の父、姉を助けて世界をまたに貿易をする、と言っていた。出身地のボストンに帰って仕事をしているという葉書を戴いたけれど、そのはつらつとした姿を想像するだけでも楽しい。「たんのしかった」と書いてある彼女の頼りからは、世界の匂いがするような気がする。

トピックス

ドイツからの短期留学生 ペーター・ベラネク君 卓球で大活躍！



男子団体で優勝した学園大Cのペーター選手
（県立総合体育館）

ドイツ・ラインランドプファルツ州立経済大学からの短期留学生ペーター・ベラネク君が、昨年12月８日に行われた熊本県協会長杯卓球大会に出場し、団体優勝に貢献するなど大活躍した。

学園大Ｃチームの一員として出場したペーター君は身長194cmの長身から繰り出す迫力あるプレーで優勝に貢献、学園大Ｃチームは予選リーグを突破し、決勝では強豪のNEC九州を破って見事団体優勝。ペーター君は準決勝で敗れたほかは４勝を挙げる大活躍だった。翌日の熊本日日新聞のスポーツ面に写真入りで大きく紹介され関係者を喜ばせた。

９歳で卓球を始めたペーター君は、昨年９月本学に留学すると早速卓球部に入部。日本語は非常に流暢で、明るくひょうきんな性格は部員のなかにもすぐに溶け込み、一躍クラブの人気者となった。本学卓球部の実力は九州地区でも定評があるが、頼もしい助っ人を得て、このほかにも熊本市長杯でも団体優勝するなど好成績をあげた。

ペーター君は「卓球部では部員とコンパに行ったり、ドライブに行ったりとても楽しかった。大会で優勝できたのはとてもうれしい。卒業後は日本かアジア関係の会社に就職して国際マーケティングの仕事がしたい」と語り、12月下旬にドイツに帰国した。

日韓学生交流計画による 訪韓メンバーを派遣

主催：財団法人日韓文化交流基金

1993年７月に熊本県を通じて財団法人日韓文化交流基金主催の韓国大学生訪日団のホームステイ等の受入れを行ったご縁から、同基金の相互交流事業である日韓学生交流計画に本学からも毎年２名の学生を推せん、参加させていただいている。なお、派遣費用も、財団法人日韓文化交流基金の負担による。

財団法人日韓文化交流基金は、昭和58(1983)年12月、外務省所管の財団法人（公益法人）として認可を受けて設立。以来日韓両国民間の文化交流を強化し、相互理解と信頼を深めることによって、日韓両国、ひいてはアジアの安定と繁栄に寄与することを目的とし、人的交流事業、文化交流事業、日韓学術文化青少年交流事業を実施している。

９泊10日の訪韓期間中には、釜山でのホームステイや大学を訪問しての学生交流会や講義参加、また企業訪問、板門店や歴史的遺跡の見学など豊富な交流日程が準備されている。毎回日本全国の大学生25名程度で構成される訪韓団の一員として本学からこれまでに７名の学生達が派遣されている。

〔本学からの派遣団員〕

〈第１回〉　1994年10月18日(火)～10月27日(木)
　外国語学部東アジア学科１年　　徳丸悦代
〈第２回〉　1994年11月１日(火)～11月10日(木)
　商学部商学科１年　　藤田香織
〈第３回〉　1995年３月７日(火)～３月16日(木)
　商学部商学科１年　　白川良昭
〈第４回〉　1995年10月31日(火)～11月９日(木)
　外国語学部東アジア学科２年　　長野　恵
〈第５回〉　1996年３月19日(火)～３月28日(木)
　商学部経営学科３年　　原口貴之
〈第６回〉　1996年10月29日(火)～11月７日(木)
　社会福祉学部社会福祉学科３年　　齊藤あかね
〈第７回〉　1997年３月４日(火)～３月13日(木)
　商学部第二部商学科４年　　高田理史

第６回 外国人留学生弁論大会

本学に在籍する外国人留学生が日本での生活のなかで体験したこと、考えたことなどを様々な視点から発表する、国際交流委員会主催「外国人留学生弁論大会」が11月30日開かれた。

第６回目となった今回は、学生会館４階の多目的ホールに約200人の聴衆を集めて開催。アメリカ、中国、韓国、ドイツ、ブラジルの５か国、15人の留学生が日本語で熱弁をふるった。審査の結果、「私にとっての日本－教育を中心に」の演題で「教育が日本社会の進歩に大きな役割を果たした。教育は国家、社会、文化をつくる大切な働きをする。21世紀を担う人間をして、日本の教育について理解を深めるとともに新しい日本観の構築に向けて努力したい」と語った蔡元欣さん（中国・桂林市からの派遣留学生）が最優秀賞に選ばれた。

トピックス

第6回外国人留学生弁論大会の模様が12月10日付けの熊本日日新聞（夕刊）で大きく紹介されました。

熊本日日新聞　（夕刊）　平成8年（1996年）12月10日　火曜日

外国人留学生の日本語弁論大会

熊本学園大

「外国に留学したい」―そんな夢を抱くヤングたちも多いはず。熊本で学ぶ外国人はいわば夢を実現した"先輩"だ。熊本学園大（熊本市大江）で開かれた外国人留学生の日本語弁論大会に出掛けた。

熊本学園大の外国人留学生弁論大会には5カ国の15人が出場

言葉のカベに苦戦、思いがけない親切に涙…

優しさと温かさに触れた

賞金は旅行に　最優秀賞の蔡元欣さん

最優秀賞に選ばれた蔡元欣さんは「日本の教育への理解を深めるとともに、新しい日本観の形成に努めたい」

大会は今年で六回目。五カ国の十五人が出場した。内訳は中国八人、韓国三人、ドイツ二人、アメリカ、ブラジルが各一人。発表内容は留学生たちの置かれた環境と体験を物語っていた。

異国に来て最初の問題はやっぱり言葉。ビアトリス・モレノさん（26）＝経済学部四年＝は、熊本市の姉妹都市・米サンアントニオ市から九月に来熊したばかり。「日本人の名前や固有名詞がなかなか覚えられない」と苦戦中だ。「何度も聞き返すけど、いつかは必ず覚えます」と意欲を表明。

「テレビのお笑い番組を繰り返し見るうちに言葉が分かるようになった」と話したのは趙英偉さん（26）＝中国、商学部二年。「でも、次第に気分が悪くなった」。若い女性たちが交際相手を笑いものにする番組内容を、「愛の素晴らしさを知らない」と批判した。留学生の目を通して今の日本の風潮を突き付けられ、ドッキリ。

でもホッとしたことに、留学生の心に一番印象的に残っているのは、人の心の優しさと温かさのよう。

韓国・大田大から来ている李宰宿さん（31）＝外国語学部三年＝は夏休みの貧乏旅行で出会った優しい日本人のことをスピーチ。神戸の食堂で働く震災被災者から、思いがけず受けた親切について語る場面ではもう涙目。「本当に渡る世間に鬼はなし」と締めくくった。

郭学雷さん（26）＝中国、商学部一年＝は入学前に熊本市の飲食店でアルバイトしていた時の体験がテーマ。酔客から受けた屈辱と、自分の代わりに酔客に土下座した後、「あなたを信用している」と言ってくれた店主。「どちらも忘れられません」

最優秀賞に選ばれた蔡元欣さん（31）＝中国、商学部＝は熊本市の姉妹都市・桂林市出身。江戸時代以来、日本の教育が経済発展に果たしてきた役割を堂々と論じ、奨学金四万円を手にした。蔡さんは「日本を旅行する足しにしたい」と大喜び。もっといろんな日本を知ってほしいもの。

大田大から来た成大永さん（31）＝外国語学部三年＝は日本留学の結果、中国に抱いていた先入観が改まった経緯と、日中韓三国のあるべき未来を語った。留学のメリットはその国を知るだけじゃない。

留学生に聞いた日本の大学生の印象。一位は「あまり勉強しない」。図書館にいるのは留学生と思って間違いないそうで、ちょっぴり情けない。二位は「消極的でなかなか声を掛けてくれない」。わざわざ熊本を留学先に選んでくれた彼らと仲良くしない手はないよね。

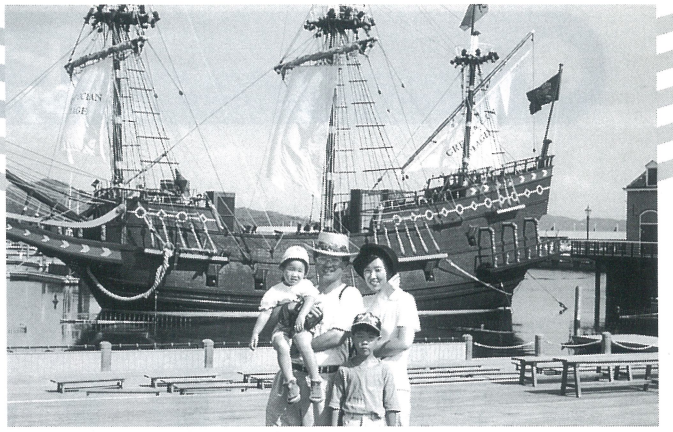
第6回外国人留学生弁論大会　出場者一覧

受賞	氏名	国籍	所属	弁論テーマ
最優秀賞	蔡元欣（サイゲンキン）	中国	商学部経営学科（桂林市派遣留学生）	『私にとっての日本―教育を中心に』
優秀賞	日下野成次（クサカノセイジ）	ブラジル	商学部商学科　学部研究留学生	『日本が見える、世界が見える』
〃	成大永（ソンデヨン）	韓国	外国語学部東アジア学科　3年（大田大学校交換留学生）	『あえて日中韓、三国を語ってみる』
特別賞	Peter Beranek（ペーターベラネク）	ドイツ	経済学部国際経済学科　3年（ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生）	『ボールは丸い』
〃	郭学雷（カクガクライ）	中国	商学部商学科　1年	『わすれられないこと』
努力賞	李羊宿（イヤンスック）	韓国	外国語学部東アジア学科　3年（大田大学校交換留学生）	『渡る世間に鬼はない』
〃	尹浩穎（インジェイン）	中国	経済学部国際経済学科　4年（深圳大学交換留学生）	『私の祈願』
〃	黄益培（コーエキバイ）	中国	経済学部国際経済学科　3年	『我輩も猫である』
〃	霍莉莉（カクリリ）	中国	経済学部経済学科　学部研究留学生	『夏休み』
〃	Beatrice Moreno（ビアトレスモレノ）	米国	経済学部　国際経済学科（サンアントニオ市派遣留学生）	『チョコレートアイスクリーム』
	顔尤梅（イェンロンメイ）	中国	経済学部国際経済学科　4年（深圳大学交換留学生）	『日本人は、つらいよ』
	朴珍姫（パクジンヒ）	韓国	経済学部国際経済学科　学部研究留学生	『だるまの日本留学記』
	趙英偉（チョウエイイ）	中国	商学部商学科　2年	『いつか愛の風が吹く』
	徐蒙（ジョモウ）	中国	商学部商学科　学部研究留学生	『私の故郷―天津』
	Silke Deuerling（ジルケドヤリング）	ドイツ	経済学部国際経済学科　3年（ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生）	『アフターファイブ』

教員交流

いっしょに暮らす社会

大田大学校副教授
慶　益　秀



ご家族と一緒に

熊本での１年間の生活は本当にいい時間でした。清い空ときれいな水そしてよく維持されている自然環境のために、先だけを見ながら暮らしていた韓国での生活方式から外れて、過ごした今までの40年の人生をゆっくり振り返られる機会でした。

その間、日本の所々を歩き回りながら、日本にはウォークマンのような小さくて細密なものがあるばかりでなくて、大自然ともどもに暮らしているのを見つけました。そうすると精密なウォークマンから大自然に至るまで、今の日本が存在することができるようになった力は何だろうか、私なりの考えで見ると、日本人の生活方式は韓国人と比べて、徹底した個人主義ですが、その中でも他人たちと、そして生きている全てのものと、いっしょに暮らすとの意識が日本人の心の底辺にあると思います。

例えば、まず、日常生活化されている自転車文化は、現在一番深刻な問題の中の一つである公害の防止のために大きく役に立っていて、学園大学の本館のロビーにはもちろん、夏休みの時大田大学校からの研修団が来た時に泊まった天草の青年の家の玄関にも設置されていた車いす、障害者たちのためにどこでも問題なく車いすで通れるように配慮されている道路の都合、研究室の出入口のそばはもちろん缶ビールの蓋のそばまで書いている点字等は経済的効率性だけを先に立たせれば絶対できないことですが、一般人より活動が不便な人たちといっしょに暮らすとの意識が日本人の心の根底に存在するためにできると思います。

ふたつめは、11月託麻祭の時見た安全意識と秩序意識です。韓国では‘祝祭（ちゅくぜ）’といわれる学園祭の時、学生たちの各種の食べ物の販売のためにガスの使用が必至ですから、このための事故のために徹底した安全教育と消火装備の構え、そして入学試験日関係者がでてきて赤い信号機を持って直接車輌を整理する様子は、‘早く早く！’になれている韓国人にとっては本当にうらやましいものでした。そして徹底した個人主義の許容範囲の内で自由を思い切り満喫しますが、一応決まった時刻になると間違いなく皆が一斉に片付けて、いつそうしたかのような様子。テニスをやってからは大きくて重い箒で必ず掃いてから帰る様子もやはりうらやましいものでした。生活の所々にこのようなものが行われて、その結果阪神地震のような大惨事の時でも秩序の維持ができたと思います。

それではこのような日本人の生活方式はどのように培養されたものでしょうか。私はその解答は保育園の時からの教育にあると思います。10年前英国へ行った時、英国の教育部の関係者たちが、日本の発展の原動力が教育にあると結びつけて、日本の教育界を訪問したと聞いたことがありました。当時はおかしいと思ったんですが、今度の滞日期間の間、保育園と小学校へ通った子供がいて、日本の教育の実際の様子を見る機会があり、当時の英国の判断が間違わなかったという感じがしました。例えば、保育園の運動会の場合、各種の準備物と飾りが様々でしたが、その大体が先生方が園生たちと一緒に用意したものだそうです。ただし園生たちの年が、３ないし５才に過ぎないですから、実際は先生方が夜おそくまで直接つくったのです。また小学校の場合は、校長先生を始め多くの先生方が自転車で出退勤していて、体育時間になると先生も生徒たちと同じにはだしでともに走っていまして、特に泳ぎの時間だったら女性の先生も水着に着替えて直接水の中へ入って教える様子。自然とともに暮らす方法を教えるために担当先生が学生といっしょに肥料をつくってやる様子、そして音楽会の日は先生方も１チームをつくって‘たぬき・さる’等の扮装をして校長先生の指揮に合わせて合唱をして、特に校長先生がおしゃれな独唱を用意して、先生方と学生たちがひとつになって敦篤な情を交わすのを見ました。このように友達と先輩・後輩、そして先生方とともに生活しながら習いながらできた教育こそ本当に望ましい教育ではないかと思います。

今まで上げたものが土台になって、秩序を徹底的に守りながら、障害者たちとか大自然との暮らしができるようになって、発展された科学文明の中で日本なりの伝統をそのまま保っている現在の日本を築いたと思います。

（1996年３月～1997年２月　交換教員として本学で受入れ）

私の Montana life

熊本学園大学短期大学部教授
井　上　勝　子

日本語クラスの受講生たちと（中央が筆者）

1996年１月から８月はじめまでMSU（Montana State University）の交換教員としてMontana州Bozeman市に滞在した。交換教員には日本語のクラスを教えるというnormaがあり、Spring semesterを担当した。国際交流で重要なことは相手国の文化や人々を理解することであり、その大きな助けになるのが言語であるとも考えられ、滞在中最も力を注いだのがこの日本語のクラスなのでこのことについて述べてみたい。

はじめcreditをとりたい学生が34名もいて語学のクラスとしては多すぎるのではないかと思ったが、せっかく日本語を習いたい学生がこんなにいるのに断わるのも残念だと思い全員受講を認めた。Language Laboの科長であるRexさんは“great!”と喜ばれた。この他にも前の交換教員であった堀先生のクラスで日本語を学んでいた学生が３名（このうちの二人は現在本学にMSUからの交換留学生としてきているHolly OisonとScott Piekarczyk)と以前交換教員として本学に来ていたRobert　Smith先生John Hooton先生も参加された。また多くの日本人留学生がクラスに手伝いに来てくれたので総勢50名程のBig Classになった。

授業の初めにWelcome to “Japanese１”(『初級日本語』へようこそ！）というアンケートをとったところ学生たちはこの授業で日本語を学びながら日本の文化も学びたいという希望が多かった。また、この授業を履修した動機は、日本に行って１か月ほどhome stayしたことがあるとか日本人の妻と結婚しているので彼女の親戚と話したいとか、高校の時日本語の授業があったので日本に興味を持った、など様々であり何らかの事で日本とつながりがある学生が多かった。

授業はJapanese１だったのでひらがな、カタカナから教えtextにはいるまでかなり時間がかかった。QuizやTestも頻繁に行いhomeworkもたくさん出したが学生たちは良く勉強してきた。授業中も多くの質問をし、意見を述べるのではじめは戸惑うこともあったが慣れるにしたがって楽しい雰囲気で授業を進めることができた。

学生たちは授業に対して非常に真剣で理由なしに欠席する学生はほとんどいなかった。仕事の都合や子どもの病気でやむをえずクラスを中途でDropする学生はその理由を言ってサインを貰いに来た。授業の時は30分前にきて予習をしている学生もおり、教室の席は前から埋って行くので、後ろから埋って行く日本の大学を思うと学生の姿勢の違いをあらためて感じた。

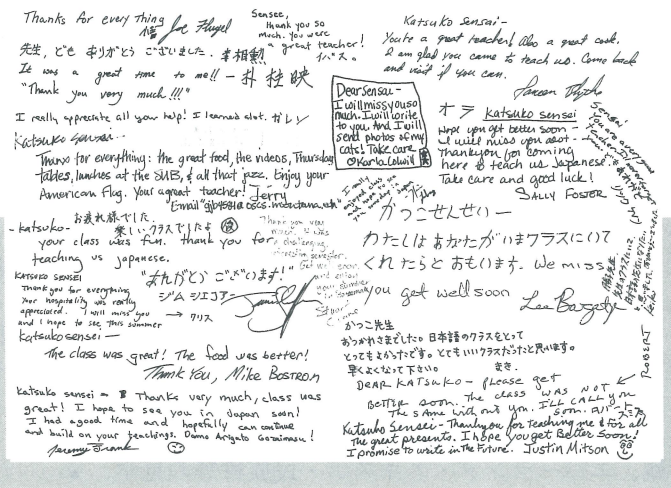
クラスの学生達とは授業以外でもカフェテリアで食事をしたり、買い物に行ったり、時には学生の家に招待されたりと本当に楽しい交流ができた。

最後の授業では学生たちから贈り物（MSUのgoodsのtrainer）と心のこもった寄せ書きを貰い、今でも宝物のように大切にしている。また、なによりも嬉しかったのは、最後のPresentationの時ほとんどの学生が日本に行って見たいと言い、来年熊本学園に交換留学生として行きますと明言した学生が二人いたことであった。今年の夏本学のキャンパスで彼等に会うことができることを今から楽しみにしている。

MSUでは５月11日に卒業式がありその後夏休みにはいった。この間、Retiremen thomeやDay care Center, USDA Forest Service, Elementary School, Middle Schoolなどいろいろな場所を訪問し、私自身の研究に関する資料を得る事ができた。

７か月間という短い期間であったが、自然に恵まれた美しいBozemanで暮し、アメリカの大学でさまざまな体験をすることができたいへん幸せであった。

（1996年１月～８月　交換教員として
モンタナ州立大学に派遣）



教員交流

大田大学校と大田広域市の勢い

熊本学園大学短期大学部講師
大　塚　信　生

オレガンマニエヨ。（お久しぶりです。）私が赴任した昨年２月末の大田は、厳寒の真只中でした。久しぶりにお目にかかるなつかしい顔・顔・顔。辛いキムチに汗をふきふき、私の心はあたたかさにつつまれ、ここが韓国であることをフッと忘れさせるスタートではありました。

日語日文学科に席を置いた私は、日本語学習に熱心にとりくむ学生達の生き生きした姿に、まず感嘆し、この数年来の大田大学校と熊本学園大学の国際交流に微力ながら携わってきたお陰で、心の通じあった学生達が多くいて、最初の授業から活発でくったくのない日本語が飛び交いました。

目も覚めるような鮮やかな新緑の５月、慶州から東海を北上して、束草を経由、雪岳山まで３年生の卒業旅行に同行し、学生達の琴線にふれながら、有名な寺院や名所旧蹟を参観し、凛然と聳える白い岩肌、その中の一つの白い岩山の頂上まで登って来ました。夜は束草の町で歌い踊り語り合う中で、精神的に若さを発揮することが出来ました。この旅行でその後の日本語会話の授業が楽しく展開出来、学生達の日本語が大変上達したことに嬉しさを感じています。

英語と日本語が出来ることがこの国では就職に必須で、よく勉強します。６月に新図書館がオープンし、更に学ぶ環境が整い、常に空席のない状態が続いています。

大田大学校キャンパス内にある
建学の理念が記された
記念碑の前で

一歩町に出て勢いよく疾走するバスに乗り込めば、にこやかに「ハラボジ・アンジュセヨ」（おじいさんお坐り下さい。）と席を譲ってくれる若者。私はこの一年すっかり『韓国のハラボジ』になりきっております。

ところで、大田大学校国際交流室の名実ともに国際交流にかける情熱。各国からの交換教授・留学生・短期研修団に対する配慮や企画行動力の巧みさ、放送局主催のハイキングや音楽会、韓国伝統の結婚式参観、エバーランド・エキスポ・民族村等の見学、食事会、このような企画は、遠く故郷を離れて勉学に勤しむ者達に、学生同志、更には地域の人達との真の交流の役割とレクリエーションの役割を果して下さったことに深く感謝しています。お陰様で学内で出合うと韓国・中国・ロシア・日本等国籍を越えて、「アンニョンハセヨ」（こんにちは）と笑顔で交流が出来ました。

今、大田大学校は、工科大学の実験棟が竣工間近であり、韓医科大学棟新築工事も２階部分まで姿を現わしてきました。また、文科大学に史学科が新設され、政治外交学科が２部から１部に昇格しました。

一方、大田広域市は1993年のエキスポ以来、どんどん発展し、屯山地区の大アパート群に続き政府の第三庁舎を始め、市庁舎等の行政機関や裁判所・検察庁や弁護士会館等の司法機関、銀行や百貨店等の大きな建物が続々と建設されています。又、私の住んでいる比来洞のアパート近くでは、南部循環高速道路と京釜高速道大田インターとをつなぐ陸橋やトンネル工事が昨年８月から始まりましたし、近くの商店街でも多くの建物が次々と建てられ、街が随分整ってきました。

10月には地下鉄東西線の工事が着工され、更に、大田広域市は昨年12月、2016年人口210万（現在130万）を目標とする「大田都市基本計画（案）」を発表しました。この案では都市目標を経済都市、環境都市、文化都市等に置き、都市機能は国家中枢、科学技術及び情報先導基地、広域交通中心都市等とし、都市空間構造を単核都心構造から多核都心構造へと発展させるようです。

このように21世紀をめざして、発展変化していく大田大学校と大田広域市の勢いに感服しています。心をこめて、チョヌン　テジョヌル　サランハムニダ。（私は大田を愛します。）

（1996年３月～1997年２月　交換教員として
大田大学校に派遣）

深圳の窓
－中国らしさの光と影－

熊本学園大学商学部講師
吉　永　心　一

「移民都市」　人口３万人ほどの静かな辺境の漁村から、数年の間に人口３百万人を擁する大都市へと変貌した深圳は、広東省からはもちろん、全国各地から移り住んだ人々＝“移民”を基礎にして成り立っています。深圳市民100人のうち99人までが移民の方々だということになるわけです。

「文化砂漠」　この言葉は、深圳には悠久の歴史と伝統に培われた文化が存在していないことを表わしています。深圳の都市としての歴史を考えれば、これは致し方のないことかもしれません。しかし、見方を変えれば、北京や上海に代表される文化とは違った、深圳独自の歴史に基づいた文化を創り出す可能性があると言うこともできるでしょう。

「大学都市」　私が滞在した深圳大学には４千人余の学生をはじめ、数百人の教職員の方々及びその家族、さらに大学内の企業や工場、ホテル、食堂、売店などの従業員の方々など、合わせて数千人の人々が生活しています。大学が単なる“教学の場”としてだけでなく、“生活の場”としても存在しているわけで、大学＝一つの都市（社会）と考えることができるでしょう。日本の大学の中では起こりえないような出来事が、こちらでは起こるのも決して不思議ではありません。

「打工者」　深圳市では、約百万人の“打工者”と呼ばれる、近隣の省から単身出稼ぎに来ている若者達が働いています。この人達は、一定期間深圳で働いた後、故郷に戻って行きます。大学内でも数多くの打工者の方々が働いておられ、深圳という街が、こうした打工者の人達の流した汗によっても支えられているのだという感を強くもちました。“打工文学”というジャンルが存在する（人気がある）ことからも、打工者の存在が深圳という街に、一種独特の色どりを与えていることがうかがえます。

「学生」　この言葉は、この国では非常に重い響きをもっているように思えます。深圳大学の学生は少人数のクラス単位で二人部屋に分かれて学内の寮で暮らしています。授業もクラス単位で受けますので、クラスメートは文字通り寝食を共にする関係にあります。卒業後の就職が国家による配分から自由選択へと変わったため、就職問題が学生の悩みの種となっています。とはいえそこは二十歳前後の若者ですので、厳しいカリキュラムをこなしながらも、趣味やスポーツに興じたり、遊びに行ったりと、充実した学生生活をおくっているようです。日本のトレンディドラマが放映されている影響からか、恋愛問題については特に関心が高く、私も授業そっちのけで学生と恋愛談義をよくしましたが、皆さん非常に真面目かつ現実的で、私自身も考えさせられることが少なからずありました。単純に日本の学生と比較はできないのでしょうが、こちらの学生は、良し悪しはともかく、“大人”という印象を強く感じました。

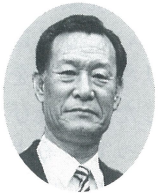
「中国らしさ」　深圳は中国らしさを感じさせる街――こういうことを言うと、中国と深くかかわってこられた方々は奇異に感じられるかもしれません。しかし、この街でわずか数ケ月ですが生活してみて、深圳は、私達の意思とはかかわりなく、中国らしさを有する一方で、独自の“文化”をもつ都市として存在しているという印象を強く感じました。“中国らしい、らしくない”という思考の枠から自らを解き放つこと――これは深圳に限らず中国という国と接していく上で、最も大切なことなのかもしれません。

（1996年９月～1997年３月　交換教員として深圳大学に派遣）

日本語学科の学生に囲まれて（外国人宿舎・潮汐楼にて）

交換教員往来

1996年９月、米国・モンタナ州立大学より第13回交換教員のウォーレン・ゲール先生（社会学）が来学。１年間の滞在予定。英語の授業を担当。



1997年３月、韓国・大田大学校より第13回交換教員の趙相根(チョウ サン グン)先生（民法）が来学。１年間の滞在予定。韓国語の授業を担当。

1997年３月、中国・深圳大学より第８回交換教員の刘群（リュウ・チュン）先生（貨幣銀行学）が来学。半年間滞在の予定。中国語の授業を担当。

1996年９月から吉田良夫外国学部教授（英語）が米国・モンタナ州立大学に第11回交換教員として赴任。１年間の滞在予定。

1997年３月から酒巻政章商学部教授（会計学）が韓国・大田大学校に第10回交換教員として赴任。半年間の滞在予定。

1996研修団往来

研修団名（受入れ）	来　学　期　間	引率者数	学 生 数
第８回大田大学校学生研修団	２月３日～２月６日	３人	16人
第１回大田大学校学生代表団	２月５日～２月８日	３人	９人
第６回甲南大学留学生研修団	４月17日～４月20日	２人	14人
第２回大田大学校夏期学生研修団	７月10日～８月１日	２人	24人
JAL スカラシップ留学生	８月３日～８月４日	３人	14人

研修団名（派遣）	派　遣　期　間	引率者数	学 生 数
経済学部「外国事情研修」米国コース	７月12日～８月８日	３人	102人
経済学部「外国事情研修」中国コース	７月15日～８月10日	１人	41人
経済学部「外国事情研修」韓国コース	７月21日～８月12日	１人	８人
第１回学生代表大田大学校訪問団	７月29日～８月１日	２人	15人
外国語学部「海外研修」英国コース	７月12日～８月12日	１人	52人
外国語学部「海外研修」米国コース	７月11日～８月12日	１人	32人
外国語学部「海外研修」中国コース	７月10日～８月６日	２人	46人
外国語学部「海外研修」韓国コース	６月20日～７月31日	１人	８人
第７回モンタナ研修サマープログラム	８月23日～９月10日	２人	20人
第６回大田大学校訪問学生研修団	８月28日～９月３日	２人	29人
第２回深圳大学訪問学生研修団	９月11日～９月18日	２人	12人

学生交流

第２回大田大学校夏期学生研修団来学

韓国・大田大学校からの夏期学生研修団が、'95年にひき続き昨夏も来学、７月10日から８月１日まで本学に滞在し研修を行った。

一行は日本語学科の学生を中心とした24名（男10名・女14名）で、期間中は本学西合志研修所に宿泊し、電車とバスを乗り継いで通学した。研修内容は主に、午前中に毎日２時間の日本語講座を受講。午後からは日本事情特講受講や企業訪問が組み込まれた。

日本語講座では平井淑子先生と福山壽子先生の担当で、日本語Ⅰでは文法を、日本語Ⅱでは会話を中心に授業が行われた。授業に臨む姿勢は団員全員が積極的で、３週間の研修が終わるころになると、学生一人ひとりの日本語会話力もアップし、本学の学生や教職員に流暢な日本語でさかんに話しかける姿が目を引いた。

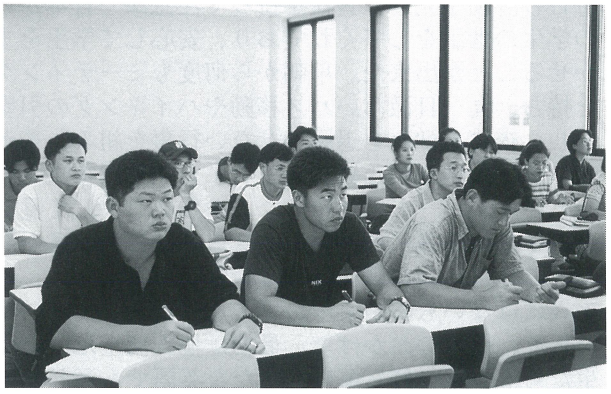
企業訪問は熊本日日新聞社、鳥居、本田技研熊本製作所、日立造船有明工場を訪れた。新聞の製作や造船、オートバイの組み立てなどの作業などを目の当たりに見学し、担当者の説明に熱心に聞き入っていた。日本事情特講では朴宗根先生、朴哲洙先生、嵯峨一郎先生、勝部伸夫先生が韓国語で講義。日本の歴史、産業、労使関係、企業などについて学んだ。

週末は阿蘇、天草へ一泊旅行に出かけた。阿蘇では雄大な阿蘇山の景色や中岳火口、白川水源を、天草では美しい海や千元の森岳ハイキングを楽しんだ。宿舎の青年の家では同行した本学学生を交えて夜遅くまで時間を忘れて話し込む姿が見受けられた。また、ホームステイもプログラムに組み込まれ、大田大学校からの交換留学生の４人も通訳に団員のサポートにと活躍した。

阿蘇山上で

７月31日には修了証書授与式が行われ、本学受入れ実行委員長の勝部伸夫国際交流委員長から一人ひとりに修了証書が手渡された。３週間充実した研修を終えた学生たちの晴々とした表情が印象的だった。

期間中は一行の礼儀正しく学生らしい行動や、積極的に研修に臨む真摯な姿が本学の学生や関係者に好感を持って受け入れられていた。


真剣な表情で
日本事情特講に臨む研修団員

モンタナ紀行 '96夏
第７回モンタナ訪問サマープログラム

熊本学園大学外国語学部教授
林　日出男

モンタナとの姉妹大学協定が締結された当初から続いているこのプログラムも、今回で７回目を迎え、その都度、少しずつ変化していったようである。今回の特色としては、時期的に８月23日から９月10日という夏休み後半の、モンタナの気候では初秋に当たる時期に行ったということ、また行程が、州北部のミズーラから入りヘレナを通って最終目的地のボーズマンへ下りてくるという北周りコースを取ったということ、そして、その旅程すべてを通してMSU国際教育局のベス・ダベンポートさん以外に４名の学生アシスタントが同行し、きめ細かに世話をしてくれたこと、などがあった。

学生交流

ミズーラ空港に我々が到着したのは深夜だった。にもかかわらず空港にはベス以下学生アシスタントが出迎えに来てくれており、彼等の笑顔に、思わず疲れも忘れ、その場に倒れ込みそうになった。モンタナの秋は早く、翌朝、目覚めてみれば、熊本の10月頃とも思えるさわやかな気候であった。

各アシスタントはそれぞれ異なった個性を持ち、その個性にあった役割を任され、完璧にそれをこなしていた様な印象を受けた。彼等はまた実に丁寧に毎日の計画を立て、責任を持って注意深く日本からの学生の世話をしてくれており、安心して学生をまかせることが出来た。早朝から何度もミーティングを持ち、丸一日激しいバス移動やハイキングの引率をし、夜にも学生を退屈させない行事を組み、皆が寝てから次の日のためのミーティングを深夜まで持つという超ハードな仕事を、いやな顔を決して見せずにこなす彼等には、感心させられることが多かった。このような仕事に対する徹底した責任感は、日本人にはないもののように思えた。

さて、彼等のおかげで、最初は他人同士だった学生たちも完璧に打ち解け、へたな英語でも通じるという妙な自信を身に付け、気がついたときには、食事のあとアシスタントを前に大声で日本文化について演説している学生だいたり、信じられない状況が見受けられた。この研修の目的の一つが語学経験であるなら、それは十分に達せられたように思う。

この旅での最初の印象的な場面は、ミズーラで山腹に大きく“M”の文字の書かれた通称“the M”へハイキングし、そこから遥か西の山間に沈む夕日を見たときである。山というより丘という高さのものであるが、ミズーラの人々は夏の遅い夕暮れ時をここまで歩いたりジョギングしたりして夜景を楽しむ。アメリカ大陸の雄大さを知るにはこの高さで十分と思わせるような経験だった。

モンタナ大学のキャンパスで

その後、我々はグレーシャー国立公園で、氷河が大陸を削ぎ取った後の生々しい光景を見た。自然が意思を持って作り上げたとしか思えない大彫刻である。グレーシャーからヘレナへのバス移動は、距離にして熊本から広島ほどを半日で走るものだが、その間まれに集落がある以外は広大な草原で牛や馬が草を食むのが見える程度。牛の群れを引き連れた、かつてのカウボーイの生活に近いものがこのあたりにはあるに違いないと想像していると、誰かが、映画「シェーン」の撮影のあった場所がこのあたりだと教えてくれて、むしろ興醒めする。

ボーズマンへ我々が落ち着いたのは日本を発って六日目だった。ここで学生達は二泊三日のホームステイを行い、英語で意思疎通することの難しさを体験し、肩を落として帰ってくるものと思われていたが、三日目の朝、ホストファミリーの車から降りてくる彼等の目は一応に輝いていた。彼等は幸運である。多くのホストファミリー業がビジネス化し、空き部屋を利用した副収入源と化してしまっている米国で、わずかな期間ではあるが今回の場合は完全なボランティアと聞いている。それだけに人間的な交流があったのに違いない。この土地にまで営利ホストファミリーの波が押し寄せてくることだけは、ないものと信じたい。

一方で、米国最後の僻地のひとつであるモンタナを訪れる日本人は年々増えている。この夏、本学からボーズマンを訪れた学生は100人を超える。治安が悪く物価の高い大都会を離れ、この地に定住する米国人も確実に増えている。今、モンタナは何を目指しているのだろうと、ふと思う。そして、異国人である私たち一行のこの旅は、モンタナの人々にとっては、いったい何なのだろう。牧歌的な田舎の町に私たちエイリアンが大挙して踏み込むことは、彼等に何かを与え、彼等から何かを奪っている。それを問題にせずに、私たちを迎えてくれるのが、多民族国家アメリカの懐の大きさなのかもしれない。改めて、MSUの関係者の方々にお礼を申し上げたい。

学生交流

1996年　第７回モンタナ研修サマープログラム日程表

月日(曜)	行程・研修内容	宿泊先
8/23(金)	本学⇨福岡空港⇨関西国際空港⇨ロサンゼルスへ 《日付変更線通過》 ロサンゼルス空港⇨ソルトレークシティ空港⇨ミズーラ到着	ホテル泊
8/24(土)	モンタナ大学(UM)訪問、ミラーズ市内見学、他	
8/25(日)	カリスペル市へ出発、聖イグナチウス教会、ビッグ・フォール市見学後、カリスペル市到着	モーテル泊
8/26(月)	クレイシャー国立公園へ出発、見学	山小屋(ロッジ)泊
8/27(火)	午前中ハイキング、エッグマウンテン見学⇨ヘレナ到着	モーテル泊
8/28(水)	キャロル大学訪問、市内見学⇨夕刻ボーズマン到着	ホテル泊
8/29(木)	市内見学、モンタナ州立大学にて歓迎昼食会、キャンパスツアー他	
8/30(金)	午前オプション活動、午後ロッキー博物館見学、ホストファミリー宅へ	ホームステイ（3泊）
8/31(土)	ホストファミリーと終日自由	
9/1(日)	ホストファミリーと終日自由	
9/2(月)	イエローストーン国立公園へ出発、自由見学	山小屋(ロッジ)泊
9/3(火)	グランドディートン国立公園へ出発・見学、ジャクソンホール市で乗馬	ホテル泊
9/4(水)	イエローストーン国立公園へ出発、自由見学後、ボーズマン市へ移動	ホテル泊
9/5(木)	午前自由行動　午後モンタナ州立大学の授業見学、送別会	
9/6(金)	ボーズマン出発⇨ロサンゼルス到着 ロサンゼルス市内観光	ホテル泊
9/7(土)	ユニバーサル・スタジオへ出発。終日自由見学	
9/8(日)	午前中　市内見学、東本願寺へ移動 午後　南加熊本県人会による歓迎会、ホストファミリー宅へ	ホームステイ（1泊）
9/9(月)	東本願寺に再集合後、ロサンゼルス空港へ⇨ロサンゼルス出発 《日付変更線通過》	
9/10(火)	関西国際空港⇨福岡空港⇨本学到着	

「交流は口を開くことから」
第６回大田大学校訪問学生研修団

熊本学園大学経済学部講師
木　下　徹　弘

昨年８月28日（水）から９月３日（火）にかけて、姉妹校である韓国大田大学校に26名の学生が研修に出かけました。このプログラムは毎年恒例の研修で、博多からフェリーで出発し、釜山にはいり、釜山・慶州を見学し、大田でホームステイをし、ソウルを経て飛行機で帰国するという旅程でした。ほぼ例年と同じコースでしたが、今回は「現代韓国を知る」をテーマに、韓国の自動車工場（現代自動車）の見学と、ホットなトピックスを選び、大田大学校の学生諸君と討論会をおこないました。この討論会で思ったことを少々ご報告したいと思います。

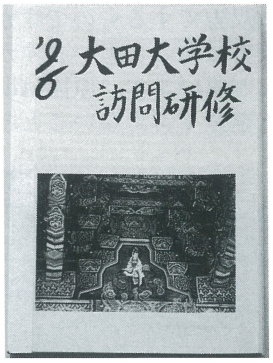
この討論会で感じたのは、韓国の学生は自己表現が上手だなぁということでした。討論会では、ワールドカップの日韓共同開催について議論をしました（使用言語は私たちは日本語、大田大学校の学生は韓国語）。研修のまえ、レポートまで書いて準備していったのですが、我々の方の発言がほとんどなく、話が盛り上がらず、さびしい討論会になってしまいました。議論は双方でするものですから、こうした結果の責任は双方にあると思いますが、半分以上は私たちにあったと思います。原因は明らかで、私たちが自分の意見を全く言えないことでした。たしか

慶州の仏国寺にて

学生交流

第６回大田大学校訪問学生研修団日程
「現代韓国を知る」

期　日	行　　程	宿　泊
8／28（水）	13：00　本学出発 15：30　博多港到着〔大学バス〕 17：00　博多港出発〔フェリー(カメリアライン)〕	船 上 泊
8／29（木）	8：40　釜山港着 10：00　釜山港発　〔バス〕 釜山市内見学（釜山タワー・チャガルチ市場） 12：00　慶州到着・見学〔バス〕 ・仏国寺、石窟庵、国立慶州博物館	〔慶州泊〕 現代ホテル
8／30（金）	午前　・慶州ナザレ園訪問 ・古墳公園（大陵苑）、天馬塚 ・慶州出発 午後　蔚山到着 ・企業訪問〔現代自動車工場〕 16：30頃　大田大学校到着 歓迎式	ホームステイ
8／31（土）	10：00　大田大学校集合／キャンパス見学 11：00　学生交流会①座談会 午後　独立記念館見学〔大学バス〕 大田市内散策	〔大田泊〕 文化観光ホテル
9／1（日）	終日　扶余見学〔大学バス〕 落花岩、国立扶余博物館	
9／2（月）	午前　大田出発〔バス〕 ソウル到着・見学〔バス〕 ・景福宮、国立民俗博物館見学	〔ソウル泊〕 ソウル ロイヤルホテル
9／3（火）	午前　ソウル　南大門市場見学等〔バス〕 17：00　金浦国際空港到着 18：45　KE734　金浦国際空港発 20：00　福岡空港着	



研修団の学生制作報告書

に海外研修は行って、見て、食べてだけでも随分得るものが多いと思いますが、人との交流は話しをして初めてできるものです。まず、口を開かないと人との交流はスタートしません。

これは日頃から感じていたことですが、今回の討論会で韓国の学生と比較してみて、私たちの自己表現の下手さをつくづくと再認識しました。みなさんは人前で自分の意見を述べたり、他の人たちと議論することをあまり重要なことと思わないかもしれません。しかし、社会にでればこれほど大切なことはありません。とくに、理系の技術者のように特定の技術をもたない文系の私たちには、自分の意見を述べたり、他の人たちと議論する能力は、競争優位を獲得するためのもっとも重要な能力・技術のひとつです。しかし、きわめて重要な能力・技術にも関わらず、私たちはこの基本的能力が大変低いし、そのこと自体も認識してないと思います。

私たちが自分の意見を述べたり、他の人たちと議論したりするのが下手なのは、練習が少ないことによると思います。これは、キャッチボールをしたことがなく、バットを握ったこともない人が野球ができないことと同じです。練習すれば上手くなるはずです。だから、みなさんがまず、「今の時代、自己表現ということが大変重要で、それにも関わらず私たちはその能力が低い（開発されてない）。だから、これについてトレーニングが必要なんだ」ということに気がついてほしいと思います。

深圳訪問を終えて
第２回深圳大学学生研修団

熊本学園大学商学部講師
蔡　剣　波

日程表どおり、第２回深圳大学訪問学生学生研修団は1996年９月11日からの一週間中国の深圳、広州、上海、蘇州を訪問した。訪問団は学園４学部から12名の学生と２名の教職員で構成された。９月11日早朝研修団は勝部国際交流委員長等の見送りで熊本から出発し、予定どおりの日程を消化した後18日に全員無事帰国した。

前回と同様、研修団のもっとも重要な目的は姉妹校の深圳大学との国際交流であった。それ以外、阿片戦争の発生地である広州、中国の歴史・文化の町蘇州、80年代中国改革・開放の象徴的存在だった経済特区深圳、90年代中国経済発展の中心である上海を訪問することを通して「中国の歴史と現状」に対する認識を深めるのがわれわれ引率者のもう一つの願望であった。

学生交流

1980年に中国政府は対外開放の窓口と国際経済改革実験場の役割を期待しながら、深圳市を正式に経済特区として指定した。特区は周囲と隔離するために、有刺鉄線等の管理網がはりめぐらされている。人・物の出入りを制限しながら、ここで壮大な実験が開始された。11日にわれわれは上海経由で深圳入りした。上海空港で入国検査を受けた後深圳入りした際に、第二国境と言われている深圳検問所で２回目の検査を受けた時の学生の驚きは鮮明に覚えている。

着任したばかりの学長をはじめ、深圳大学外事処の候先生、藍先生、本学に来られた交換教員の先生方がわれわれをあたたかく迎え入れて下さった。深圳において、われわれは深圳大学学生との交流を中心に訪問活動を行った。中国語、英語、さらに日本語、団員全員がつかえる言葉のすべてを使って積極的に交流をした。できるだけ中国語を使用しなさいというわれわれ引率者の助言どおり一所懸命努力する団員の姿勢に深圳大学の学生も共感をもったのだろうか、座談会は予定時間を倍増するほど盛り上がっていた。

「中国の方の家庭を見たい」という団員の強い希望があったため、深圳大学貿易金融学部長姚凱先生にお願いし、ご家庭を見学させていただいた。自宅用コンピューターに接続するインターネットの工事が紹介された時、中国社会変貌のスピードをもう一つの側面で見られたという得した気持ちをもったのはただ私一人だけだろうか。

われわれは深圳では三洋電気（蛇口）有限公司、深圳南油（集団）有限公司、深圳永新印染廠有限公司、上海では上海双鹿中野冷機有限公司を見学した。また、元本学留学生、日中合弁企業に勤める林木鳳氏も団員と歓談の機会を作ってくれ、後輩達に多くの刺激を与えてくれたと思われる。

この研修団の成功は多くの方々の助言と助力の結果である。第１回研修団引率者の西紀昭先生には日程を組むことから、旅行途中の細かいことまで、数回に分けてアドバイスをしていただいた。交換教授として深圳大学に滞在する商学部吉永心一先生は自分の時間を犠牲にし、大変ご協力して下さった。なにより深圳大学の先生方のご協力がなければ研修団の行動自体が不可能なので、関係者の方々に改めて深謝申しあげたい。

この研修団の成功はまた研修団の団員の努力の結果でもある。研修団の全員に感謝したい。

深圳大学学長表敬訪問で

第２回深圳大学訪問学生研修団日程
「中国の歴史と現状」

	期日	行程	宿泊
①	9／11（水）	6：00　熊本学園大学集合〔大学バス〕 6：30　出発 8：00　福岡国際空港到着　出国手続き等 11：45　MU(中国東方航空)518便　福岡出発(時差１時間) 12：35　上海へ到着 14：35　SF(上海航空)375便　上海出発 16：25　深圳へ到着 17：30頃　深圳大学へ到着	
②	9／12（木）	午前　深圳大学での交流会 学長への表敬挨拶 午後　①学生交流－外国語学部日本語科学生との座談会 夜　②民俗村見学	
③	9／13（金）	午前　③企業訪問 ・日中　深圳南油（集団）有限公司 合弁企業　深圳永新印染場公司 午後　④深圳市内と老街を歩く	深圳大学 潮汐楼 ３泊
④	9／14（土）	午前　深圳大学出発→広州 広州到着①清平路自由市場	広州泊
⑤	9／15（日）	午前　広州⇨上海 午後　上海　①魯迅公園と魯迅記念館見学 ②南京路散策　③豫園 夜　④黄浦江遊覧	
⑥	9／16（月）	午前　蘇州へ（列車）（１時間） 蘇州到着①寒山寺②虎丘③拙政園④古運河 午後　列車にて上海 上海到着	
⑦	9／17（火）	午前　⑤浦東開発区と区内企業見学 ・日中合弁企業　上海双鹿中野冷機有限公司 ・上海駐在本学卒業留学生の話 午後　⑤東方明珠タワー見学	華東飯店 大酒店 ３泊
⑧	9／18（水）	8：15　MU(中国東方航空)513便　上海出発 10：35　福岡到着 13：00頃大学到着	

学生交流

1996年度経済学部「外国事情研修」を終えて

経済学部国際経済学科長
慶田　收

経済学部の「外国事情研修」は、経済学科学生の一部を含み、主として国際経済学科２年生を対象に夏期休暇期間中に実施している。学生は一ヶ月近くそれぞれ米国、中国、韓国の大学で「米・中・韓国事情演習（４単位)」、「米・中・韓国事情特講（２単位)」として語学、経済事情、歴史、文化などを学ぶ。1996年度は、米国（モンタナ大学、モンタナ州立大学、キャロル大学の３大学）での研修に102名、中国・深圳大学での研修に41名、韓国・大田大学での研修に８名が参加した。

見送りのとき、研修への希望に胸ふくらませながらも不安げな様子だった学生が、研修後の出迎えのとき、晴々とした表情で帰国する。これは嬉しい。研修の教育効果は、第一義的にはネイティブ・スピーカーによる講義とそれに関連したアクティビティがもたらす効果である。学生は約３週間、集中的に午前に講義による授業（一部には午後にも授業）を受け、午後には企業見学、アンケート調査、異文化体験などのアクティビティをおこなう。学生は、通常の授業とは異なった授業スタイルのもとで集中的に学ぶ。これは、学生にその国への関心を高め、認識し理解することの重要性を知らせると同時に、学生生活への新たな意欲を高めるようである。

研修が求める効果として「豊かな国際感覚の涵養」があげられよう。学生は約一ヶ月の研修期間に異なった文化・生活習慣に接する。戸惑いながらも日常的な生活をし、生まれ育った社会とは異なる社会があることを実体験することになる。これは、学生にとって異なる価値観のある社会があることを認識する重要な一歩ではなかろうか。

研修直後のアンケート結果（省略）は、大多数の学生が研修に満足し、研修に参加したことは今後の学生生活にとってプラスになると答えている。過去の事例では、学生のなかには積極的に学生生活に取り組み、さらには派遣留学や認定私費留学へチャレンジするなど一層の飛躍を目指し、実現したケースもある。学生にとっては、現在の意識と研修経験をいかに学生生活、その後の社会生活に結び付け、役立てるかが重要な課題である。

1996年度英米学科第１回目の海外研修を終えて

外国語学部英米学科長
堀　正広

外国語学部英米学科の第１回目の海外研修は、1996年の７月中旬から１カ月間、イギリスとアメリカのふたつのコースに分かれておこなわれました。

イギリスコースは、神本先生の引率で52名の学生がリバプールにあるリバプール・ジョン・モーズ大学で、アメリカコースは、米岡先生の引率で32名の学生がモンタナ州のモンタナ州立大学で、それぞれ研修をおこないました。

海外研修の目的は、外国の風土に身をおき、日常生活や大学の講義を通じて異文化に直接触れることにより、新しい知見を得、同時に日本を、そして自己を客観的に認識し、本学での学習をより実り豊かなものにすることにあります。

両コースとも研修の内容は、基本的には同じで、事前研修と本研修の二部からなります。今年度は、事前研修は４月から出発直前まで毎週行われ、渡航の事務手続き、しおり作成、姉妹校からの交換留学生達の話など多岐にわたりました。現地での本研修では、午前中は英語力をさらに伸ばすために少人数の語学の授業が、午後はその国の文化や考え方を学ぶために、講義やディスカッションが行なわれました。また、見聞を広めるために研修先近くの名所旧跡を訪ねたり、受入大学の学生達との交流をおこなったりしました。学生たちは寮生活に加え、ホームステイも体験しました。研修の終わりの３日間は、ロンドンとロサンゼルスで過ごしました。

このような多岐にわたるプログラムを終えた、ほ

とんどの研修参加学生は、わずか一カ月ではありましたが、おおいに勉学意欲をかきたてられて帰国しました。

この研修の評価は、研修先の大学からの成績と帰国後提出される英文のレポートによっておこなわれます。

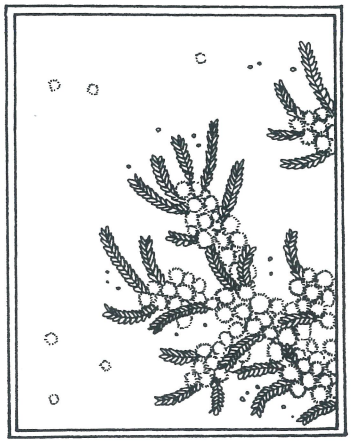
来年度のプログラムは、今年度の研修参加者におこなったアンケートを参考にして、今年度よりももっと充実した内容のプログラムを作成するために現在研修先の大学と検討中です。

経済学部「外国事情研修」参加者推移

	アメリカ	中　国	韓　国
1996年度	102名	41名	8名
1995年度	109名	41名	17名
1994年度	118名	41名	29名
1993年度	80名	40名	13名
1992年度	106名	12名	——

外国語学部「海外研修」参加者

	イギリス	アメリカ	中　国	韓　国
1996年度	52名	32名	46名	8名



1996年度東アジア学科「海外研修」を終えて

外国語学部東アジア学科長
服部昌之

東アジア学科の「海外研修」は、中国コースが7月10日から8月6日までの28日間、参加者46名、韓国コースが6月20日から7月31日までの42日間、参加者8名で行われた。研修先はそれぞれ北京第2外国語学院とソウルの延世大学校延世語学院韓国語学堂で、両コースとも研修期間1人の欠席者、遅刻者もなかったという点だけから見ても、結論として成功であったと思う。

あとでふれるように、中国コースにいくつか見直す点があり、97年度以降変更するが、韓国コースは研修開始前に組まれていた二日間の研修旅行が、先方からの連絡があり、研修中の7月11、12日に変更されるだけで、基本的に変更はない。

中国コースは以下の点を改善することにした。第1に午前中50分3コマの授業であったのを普通の4コマにする。第2に3週授業、1週西安・上海の研修旅行で、4週授業とし、研修旅行は3日として、自由参加にする。第3に2年次末までの修得単位数が34単位以下で、研修に行ってもブラッシュアップするだけの素地のない者は、次年度以降条件が整ってから参加してもらうことにし、第4に毎週土曜日に組まれていた全員参加の市内観光は取りやめ、自分達で行く－40数名の一致した移動がなかなか大変という声がサブ・リーダーだけでなく、参加者からもあったため－といった変更をすることにし、今年よりもさらに効果の上がる態勢を取りたいと考えている。

「海外研修」をきっかけに、3年次に学習意欲の高くなった学生が多くなっていることは、関係教員がすべて認めており、有意義な今後も継続すべき行事であると思う。

留学体験記（派遣）

アメリカ留学体験記

経済学部国際経済学科４年
田　辺　順　子

私は外国への好奇心から、留学を希望しました。留学先のモンタナ州立大学（MSU）ではいきなり正規の授業に入らねばならず、外国人であるというハンディは与えられませんでした。分厚い本３冊読んで、来週までに５枚以上のエッセイ提出、なんて宿題がぽんぽんでます。最初は授業の内容も理解できず、授業後先生や友人に質問してまわっていました。留学中はよく勉強したなぁ、というより勉強に時間がかかったなぁと思います。

授業では、英語のほかにコンピューターや生物学、スキー、それからカウボーイ・カルチャーを体験しようと思い乗馬などを受講しました。MSU では必修となっているコンピューターの授業では、インターネットや情報処理を学びました。MSU では既に学生全員がアドレスを持っており、先生への質問や宿題の提出にインターネットが使われています。先生は意見や質問を大歓迎してくれ、プレゼンテーションやスピーチ、ディスカッションに多くの時間をとっています。私もよく日本人としての意見を求められました。自分はどう考えるか、意見を持つことが大切であると感じました。

アメリカの学生は ON と OFF の切替えが上手です。平日はしっかり勉強し、週末はおもいっきり羽をのばします。アウトドア派の人がほとんどで、夏はフライフィッシング、キャンプ、ラフティングを楽しみ、冬はもちろんスキー、スノーボードです。また、長期の休暇には必ず旅行にでかけていました。印象的だったのは、冬休みフィラデルフィアでのことです。安い宿を求めて、郊外のＢ＆Ｂ（民宿）に泊まったのですが、丁度その時東海岸を、「'96ブリザード」という歴史的大寒波が襲い、身動きがとれなくなりました。どうしてもその日出発しないといけないのに、車が潰される程の雪が降っており、もちろんタクシーも動いていません。そんな時、災害派遣できていた米陸軍のジープが、「君達は看護婦ということにしよう。」といって私たちを車に乗せ、駅まで送ってくれました。本当に貴重な体験ができたと思います。

仲の良い友人たちとクリスマスパーティ
（右端が筆者）

私の留学したモンタナは、自然の大変美しい所です。そしてなにより素晴らしいのは、モンタナの人がモンタナを世界で一番良い所だと誇りに思っており、モンタナの自然を心から愛していることです。私は改めて日本人である自分や、育った熊本のことを考えさせられました。国際人になる前に、しっかり日本人にならなきゃ、と思います。この留学で今まで見えなかったことが見えてきた、視野を広げることができたと思います。

（1995年８月～1996年５月　交換留学生として
モンタナ州立大学に派遣）

２つの世界を広げてくれたイギリス留学

経済学部国際経済学科４年
佐　藤　伸　洋

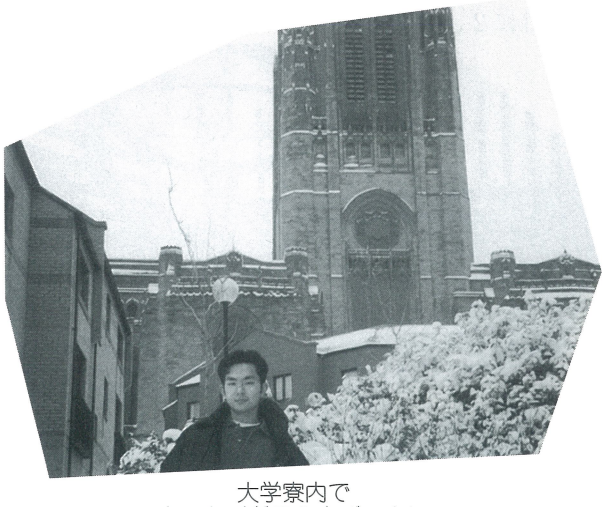
昨年の５月まで約１年間交換留学生としてリバプール・ジョンモーズ大学に留学する機会を得た。いま、テレビや雑誌では、毎日のようにイギリスの特集したものをみることができるが、実際生活すると、いままでイメージしていた物事と実際が異なったり、徐々にいろんなことが見えてきた。この留学期間に異文化の地で実体験して感じた喜びや驚き、そしてかけがえのない友人は一生の宝となった。

大学では、コンピュータや経済学などのビジネス学科の授業と英語のクラスを１日に数時間、自分のペースで履修した。ビジネス学科の授業は、講義とゼミ形式のチュートリアルからなり、とくにチュー

トリアルのクラスでは積極的な発言が求められ、1回にわたされる資料も多く内容以前に英語力においても苦労した。もともと積極的な性格ではない私は、自分から質問したり、理解できないことをわからないという勇気がなかなか持てず、授業に行くのが苦痛に感じることもあった。そんなときの友人、先生方の励ましや手助けには本当に勇気づけられた。一方、留学生を対象とした英語のクラスは、レベル別に10人前後にアジア、アフリカ、ヨーロッパからの仲間とともに分けられた。英語教育の体系は、オックスフォード大学が、長い伝統と研究に基づいて作り上げたと聞いたが、なるほど毎回楽しく、合理的で私の英語力もずいぶん伸びたと思う。今日、英語が国際語となったのはこうした草の根レベルでの膨大な努力の結果であることを実感した。

イギリス最大のアングリカン・キャセイドラルがそびえる丘のふもとにある寮では、4人のルームメイトと共に共同生活を送った。それぞれに十分な広さの個室がありとても快適だったが、夜は決まって一緒にキッチンに集まり食事をしたり、ゲームをしたりして楽しんだ。週末には寮のあちこちでパーティが企画され、朝まで楽しく飲みながらたくさんの友達と知り合うことができた。

冬休みやイースターには、イギリス国内のみでなくヨーロッパをひろくまわることができ、その世界の広さ、深さに僅かながらふれることができた。日本と異なり四方を他国に囲まれたそれらの国々、地域ではそれぞれが自分達の文化に誇りをもって生活していたのが印象的だった。変化に富む地形や各地で目にすることのできる美術品や建築群は生きた教科書のようだった。



大学寮内で
キャセイドラルをバックに

1年間の留学期間の間には、これまでに考えられなかった広い外の世界に触れることができた。また、それと同時に孤独や自分の将来についての不安との葛藤のなかで内面的な世界も広げることができ、それが自信となった。卒業後もこの勉強は一生続け、自分の世界をひろげたい。

（1995年9月～1996年5月　交換留学生として
リバプール・ジョン・モーズ大学に派遣）

フランス留学を終えて

商学部第二部商学科4年
上　村　朋　子

平成7年9月より平成8年6月までフランスのポワチエ大学に留学しました。ポワチエ市はパリ、ボルドーを結ぶ古くからの交通の要所として栄え、人口約13万、現在はそのうち約4分の1が学生という学生都市です。パリ、ボルドーなどに比べると随分こじんまりとした感じですが、クレン河に臨む小高い丘の上にあり、12世紀ごろに建てられた教会や大聖堂が今もそのまま利用されている静かな街です。

前期は文学部の中にあるフランス語講座に通い、後期は短期技術大学（IUT）のプログラムに参加しました。ここでの授業はクラスが13人と小人数である上に、フランス人学生は2人とほとんどがヨーロッパからの留学生なので、分からない点はすぐに質問すること、反対に先生からの質問形式で進むことも多く、私にとっては、毎日が緊張の連続でした。日本やアジアへの関心が高く、自分に向けられる質問に対して答えに窮することもしばしばあり、語学力もさることながら、経済・経営に関して日本やアジアの動向について自分の不勉強を恥ずかしく思いました。

授業と平行してのグループワークによるレポート作成の課題も多く、話し合いが難航すると英語が、スペイン語が飛び出すというように学生同士ぶつかり合いながら、それぞれが様々な国籍の人とどのように共同作業を行っていけばよいのかを学ぶ良い機

留学体験記（派遣）

会になったと感じました。グループワーク進行中は、ここぞという時に自分の考えや、自分の調べたことをうまく表現できずに随分悔しい思いもしましたが、コミュニケーションの手段としての言語の大切さを学び、相手の思いや考えを察して行動する日本的行動と、自分の考えや感情を話し合い、合意に達した上で行動するヨーロッパ人の行動パターンの違いなど実際に体験することができ、改めて日本の文化や自己を見直す機会となりました。

生活面に関しては優しく、学業に関しては厳しく、いつも温かい態度で接してくださった先生方、ノートを貸してくれたり、よく遊びに誘ってくれたクラスメートに感謝しています。今後もフランス語を続けて、もう一度ポワチエの街に懐かしい人々を訪ねたいと思います。

最後になりましたが、留学の機会を与えて頂き、ありがとうございました。

（1995年９月～1996年６月　交換留学生として
ポワチエ大学に派遣）

ポワチエ市市庁舎前のカフェテラスで学友と
（右端が筆者）

1 年間留学して感じたこと

経済学部国際経済学科４年
早　川　　愛

今回の１年間の留学中、私はいろいろと中国の文化や習慣を目にする事が出来ました。１年間中国に居たにしては私の中国語のレベルは低く、恥ずかしいかぎりですが、それなりに中国人の友達も出来、楽しい留学生活を送る事が出来ました。深圳は中国の中でも最も経済発展の著しい地域で、香港の影響を大きく受けている街です。そして、広東省の中にあるので、料理はとてもおいしいのですが、値段がかなり高く、中国で暮らすのと、熊本で暮らすのとほとんど変わりないくらい、お金をつかっていました。

でも、さすがに料理の油っこさに飽きてきて、自分達で日本料理を作って食べる事が多くなりました。一度友達の中国人にカレーライスを作って食べさせたところ、あまり受けなかったようで、後で他の中国人に聞いてみると、カレーという物はあまり中国人は好きでないということが分かりました。どうして？ときくと、「油が入ってなくておいしくない」とのこと。この答えには私もびっくりさせられましたが、油というものは中華料理には本当に欠かせないものなんだということが改めてわかりました。もう一つ、私が中国に来て、びっくりした事があります。それは、同性同士が手をつないで道を歩いているという事です。日本でも何度か女の子同士が手をつないで歩いているのを見た事はあったのですが、男性同士が手をつないで歩いているのを見た時は、私は本当に自分の目を疑いました。中国人の友達に聞いてみると、「そんな事はおかしくないよ」という人もいれば、「私も変だと思うんですが…」という人もいる。多分外国の文化が入ってくるにつれ、だんだんと減っていっているみたいですが、それでも１日に２、３組はそういう風景を目にするので、

一緒に留学した酒井理恵さんと
大学内図書館前の噴水前で（左側が筆者）

初めの内は、通りすぎるまでボーッと見ていました。最近は慣れてしまいましたが。

この様にいくら隣の国だからといって、文化や習慣が似ているのかというと、全く別の物があったりします。そして中国は今、最先端の物と、中国独特の古い物とが、交わっている状態が続いています。だんだんと経済発展をするにつれ、失われていく物が今はまだ中国にあるのです。私は今回１年間の留学でしたが、それでも日本とは違うなと感じる事がありました。きっと中国はもっと大きくなる、そう思うと、中国特有の文化や習慣にもう会えなくなりそうで寂しい気もしますが、第二の母国＝中国となってしまった今、私は、中国の発展を心待ちにしています。中国の赤ちゃん達がはいていたあのおしりがパカッと開くパンツがなくならないように祈って。

（1996年２月～1997年２月　交換留学生として
深圳大学に派遣）

隣の国「韓国」

商学部経営学科３年
渡　邊　照　男

２年前初めて訪れた時からどうしてもここが外国とは考えられなかった。街を行く人々や風景、どれ一つとってもあまり違和感がなく日本と同じように生活できるだろうと思っていた。しかし実際に生活すればするほどこんなに違う国があるのかというくらいにカルチャー・ショックも大きかった。

小高い丘の上に位置する大田大学校のキャンパスは山に囲まれているせいもあって空気がよく、何よりも一年中の四季を味わうことができるのでいい。春には桜が咲き乱れ、夏には青々と茂った草木が、秋には真赤な紅葉、そして冬は見事に雪化粧した山々が教室の窓の向こうにいつも顔をのぞかせていた。

授業は１クラス40名くらいの小人数で、学生が常に積極的に質問し、論議し、自己主張する。学園大の講義では見られない光景に最初はそのパワーに圧倒され、自分はいつも緊張するばかりだった。

休みの日にはよく旅行に出かけた。私の趣味でもある旅行は留学生活の中でも忘れることのできない思い出を沢山つくった。知らない地を地図一つだけもって、人に尋ねながら時には道に迷い、あげくの果てにはバスや電車に乗り遅れることも…。しかしそのような新しい地を踏み、見て聞いて感じたことが私にとって生きた経験でもあり楽しみでもあった。今でも忘れられない思い出は日語日文学科の卒業旅行に参加したことである。新羅の王都でもあった慶州では天馬塚の古墳や仏国寺、その他様々な栄華を残す遺物に異国の情緒を感じて、東海（日本海）では美しく真っ青な海とは裏腹に、浜辺沿い一帯に張り巡らせた鉄条網が何とものものしく北朝鮮との緊迫した雰囲気を漂わせた。雪岳山では山の岩はだは独特な奇岩奇峰を形成し、大自然の雄大さをみせてくれた。決して十分とはいえない宿所で手作りのご飯を食べ、語り合い、雑魚寝したことは学生旅行ならではの醍醐味だといえる。

私は留学生活する上でいち早く韓国人と親しくつきあいたいためになるべく韓国の生活習慣に従ってみるように心がけた。それが韓国を知り韓国人を理解する近道になると思ったからである。それでも、違う文化の中で理解できないことはいくつかあった。下手な韓国語のため自分の気持ちを十分理解してもらえず息苦しい思いもした。何といっても日本とは正反対ともいえる民族性には何度も戸惑いを覚えた。そのため誤解が生じ、いつしかみえない壁をつくってしまうこともしばしばであった。しかし、いったん彼らとキムチ鍋をつつきあい焼酎を酌み交わせば、いつしかその壁も消えていった。

（1996年２月～1997年２月　交換留学生として
大田大学校に派遣）

韓国の友人たちと
（下段右端が筆者）

留学生のこえ（受入れ）

English in Japan: Everywhere & Nowhere

モンタナ州立大学
スコット・パイカーチャク

One of the most peculiar things I've observed during my stay in Japan has been the presence and use of English. Before I came to Japan, I was aware that many western things, among them English, were somewhat popular in Japanese pop culture. Nevertheless, I wasn't quite prepared for what awaited me. My first experience was when I arrived in Osaka International Airport. I stepped off the plane and had no idea where I had to go to board my connecting flight to Kumamoto. Since I was now in Japan, I had resigned myself to the fact that no one was going to be speaking English anymore, so I prepared to use my meager Japanese skills to ask an airline attendant where I had to go. I was quite surprised when she asked in English, "How may I help you?"

I soon learned, however, that airline employees are somewhat of an exception and that, indeed, a majority of Japanese people do not speak English, save what they remember from their high school education (which, in most cases, isn't much). During the next few months I continued my observation of English in everday Japanese life. I couldn't quite understand it. It was everywhere. Store signs, advertisements, menus (one pizza delivery store ad boasted, "We deliver right your door," as opposed to "right to your door"). I was puzzled as to why English was so widely used when, in most cases, the average Japanese person will not understand it. Then there was the peculiar fashion in which it was used. Very rarely did the English I saw make a great deal of sense. I'm sure every foreigner who comes to Japan remembers the first time he/she sees the soft drink called Pocari Sweat. Sweat?!? What would ever possess a company to name a drink after a bodily excretion is beyond most speakers of English, native or non.

I still see nonsensical English phrases every day, on signs, T-shirts, magazines. It's impossible to exist for even a day in Japan without being bombarded by them. What I'm starting to realize, though, is that it's not the literal content of the English that matters as much as the idea that the English itself represents. English is fast becoming the universal language of use in the international community. It's exotic. It reminds people that there's a world out there that's working toward a future of unity and cooperation that may not be as far off as we think. And maybe that's the true attraction of English in Japan.

（1996年９月～1997年７月　交換留学生として本学で受入れ）

キャンパス内で
（中央が筆者）

北から九州まで

ラインランドプファルツ州立経済大学
ジルケ　ドヤリング
アネッテ　ディーツ

私達は去年留学をするため盛岡の国際交流センターで半年ぐらい日本語の勉強をしました。

この留学生の中から４人が熊本学園大学で勉強するために熊本へ行こうと思いました。男の子２人と女の子２人でした。

盛岡から熊本まではとても遠いのでどうやって行けばいいのか、学園大学の国際交流センターに電話をかけました。自転車を熊本まではこびたかったので何をすればいいのかを聞きました。それで国際センターの人が冗談で「自転車で来たら…」と答えました。

話を終ってからその冗談にした助言をよく考えました。これが一番安い方法それにいい経験をすると思いました。でも皆が心配するかもしれないと思ったのでおもいつきをないしょにしました。

毎日90キロぐらい自転車に乗り東京まで５日かんかかりました。１日中自転車に乗ったのでいつもちょっときたない状態でした。この状態でホテルをさがすのがちょっとはずかしかったが日本人が皆んな親切にみつけるのを手伝ってくれました。

東京ベイから北九州行きのフェリーに乗りました。船がゆれる時ぐあいが悪くなりました。でもそれがおかしをいっぱい食べましたから全然へいきでした。

朝５時ぐらいに北九州につき午後に問題なく日田につきホテルをさがしたり、学園大学の国際交流センターに電話をしたりしました。

自転車で来ることをだれにも話さなかったので「今、日田にいるんでしょう、自転車でここまできたんでしょう」と言われたとき皆がすごくおどろいて笑ってしまいました。皆さんにぜったい「外国人ってめずらしい人だね」と思われたと思いました。

自転車移動中に
（左がアネッテさん，右がジルケさん）

次の日最後のツアー。熊本まで山がいっぱいありました。９月だったのでとてもあつかったんです。さいごの日だったのにあきらめようと思いました。でもあきらめちゃいけなかったのでがまんをしました。

どんなにつらくてもおもしろく、いい経験でした。

国際交流の皆さんびっくりさせてごめんなさい。いつもたいへん世話になりました。

熊本はたいへん楽しかったです。ぜひまた熊本へ来ると思います。でも次はドイツから飛行機で来ます。皆さんさよなら。

（1996年９月～1997年２月　交換留学生として本学で受入れ）

日本に留学して

大田大学校
李羊宿（イヤンスック）

私は、96年３月18日、短期留学生として、熊本学園大学を訪れた。季節はまだ冬だったが、熊本の空気は暖かくて、頬を撫でる風はさわやかなくらいだった。

大学の３年間憧れていた日本への留学なので未知の世界への挑戦はあまり怖くなかったが、親を離れての一人暮しは初めてであり、ホームシックにかからないかと心配だった。でも、この心配は４月に学校が始まると、日本語で行われる毎日の授業といろいろな留学生との交流会などの活発な活動の中で、いつのまにか消えていった。

夏休みを迎える前までの約４ケ月間は新しい生活に慣れるのに一生懸命だったから時間に余裕がなかった。そのうち、あっと言う間に夏休みが来た。日本の夏は蒸し暑くてエアコンが無ければ、生まれたばかりの赤ちゃんが死んでしまうぐらいだと言うわさは本当だった。しかし、何とかこの暑さを凌ごうと９月の上旬、１週間の予定で、日本人の友達と旅に出た。東京、大阪、奈良、京都、神戸、広島

留学生のこえ（受入れ）

の順で回ったが、東京は超高層ビルがぎっしり立ち並んでいて、どこへ行っても人込みで混雑していた。まさに、日本の発展した経済力を誇っているかのようであった。

それに比べて、奈良と京都はまるで歴史ドラマの一こまを見ているような気がした。特に、東大寺の中の座仏像と清水寺、平安神宮の雄大な規模からは当時を生きていた人々の息遣いが感じ取れた。

そして、一番行ってみたかった神戸！

神戸ではまだあちらこちらで地震で壊れた建物を見掛けた。また、阪神高速道路の歪んだ跡もそのまま残っていた。夕御飯を食べに入った食堂は実際地震で店をなくした人が経営していて、あの時の話を直接聞くことができた。また私たちの貧乏旅行のことを聞いて、学生時代の経験話をして下さった。その上、夕御飯までご馳走していただき、おかげで何日かの疲れがあっと言う間に飛んでしまった。

１週間の旅はほんの短い期間だったが、いろいろなことを考えさせられるいい経験になった。

まず、自分の国のことについて今までより冷静に判断できるようになったし、日本と日本人に対して、ある程度客観的な見方ができるようになった。戦争が終って両国は51年を迎えた。この50年という時間の流れの中で私達はどのような交流を重ね合ってきたのか疑問が残る部分もあると思う。そこに、歴史観を正確に捉えないまま世界観を捉えているという点が見受けられる。

一緒に旅行した友人と
（左が筆者）

今年も新しい留学生達が日本を訪問することになるだろう。できるだけたくさんのことを自分で経験して、感じて、正しい価値観が持てるように頑張ってほしい。

（1996年３月～1997年２月　交換留学生として本学で受入れ）

託麻祭を振り返って

商学部商学科１年
郭（カク）学（ガク）雷（ライ）

昨年の11月、新入生として熊本学園大学での年に一度の託麻祭を迎えました。初めて参加しますので、わくわくしていました。しかも、うち合せをしたら、国際交流センターの先生たちの言葉巧みなお誘いについ乗ってしまい、中国チームのリーダーとなりました。

毎年中国チームは水ギョーザを作ることになっていますが、昨年メンバーはだいたい１年生と２年生が中心で、経験のある人はほとんどいませんでした。それに昨年の夏、大腸菌Ｏ－１５７流行のため、衛生的な面も特に厳しいものでした。“ちゃんとした料理屋さん”だってお客が少ないのに、学生たちがつくった食べものなんて買ってくれるわけないんだろうと私は最初から思い込んでいました。

「あきらめるのはまだ早い」と、まず自信をつけてくれたのは私の家に訪ねてきた３年生の先輩馬さんでした。「ギョーザ作りは男たちにはちょっと無理ですから、全部女性たちにまかせてください」。馬さんのやる気を見て、私もよし頑張ってやろうと決心しました。

それから国際交流センターの先生たちにも熱い応援をもらいました。まわりとうまく行かない時、いろいろと交渉していただいた西村先生。メンバーの集まりからギョーザ作りまでしていただいた切通先生。そして、ガスコンロがないと思って自分の家のコンロを持ってきていただいた名前を知らない先生たちには本当に感謝しています。

新入生歓迎ピクニックで
留学生を代表してあいさつした筆者

しかし、なんと言っても一番感動させてくれたのは、やはり託麻祭の３日間の中国チーム全員の団結力でした。まわりとのぶつかりや、３日間ずっといそがしくて食事の時間さえ取れない等いろいろ困難がありましたが、３日間ずっと立ちっぱなしでギョーザと肉まん作りを担当した馬さんご夫婦、つらいけど３日間ずっと笑顔を見せてくれた徐さん、なにか足りない時走って買ってきてくれた中山さん、人手が足りない時すぐ現われる何さん、冗談を言って笑わせてくれた趙さん。彼らを見て、なんとか元気が出るような気がしていました。みんなで力を合わせて努力した上で、今回のギョーザ作りが成功しました。

もしも、もっとも汗を流した人がもっとも感動する権利があるとすれば、今回の託麻祭でも一番感激できたのは私たち全員ではなかったかと私は思います。

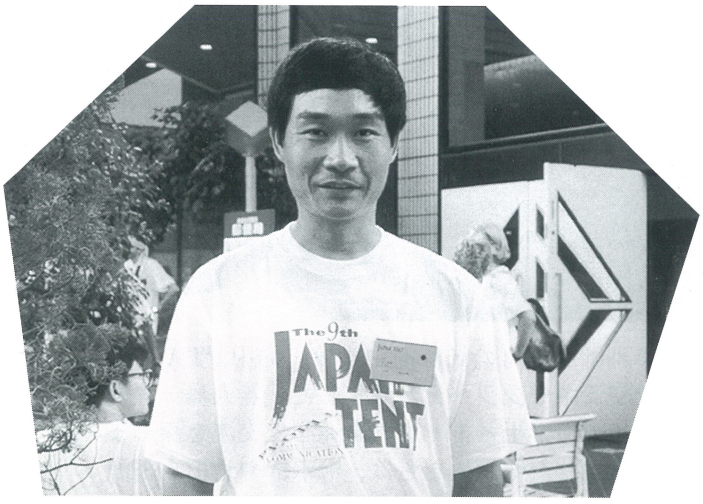
肥後銀行徒然寮での生活についての感想

経済学部国際経済学科４年
何成雨（カセイウ）

私は２年前に熊本学園大学国際交流センターの御陰で、財団法人留学生支援企業協力推進協会に推薦されて、1995年４月肥後銀行熊本徒然寮に入寮させていただきました。２年間に渡って肥後銀行の社員のみなさんと共同生活して参りました。それが今では日本でのよい思い出となりました。

まず、寮に入ってから勉強の時間がたっぷり増えました。また大学の教科書に載っていない事を沢山勉強しましたし、日本人の現実の生活習慣を直接経験することができました。また、日本人の若者と直接コミュニケーションができました。もちろん、大学にも若者はいっぱいいますが、コミュニケーションはなかなか難しいのです。それはたぶんお互いの年齢による考え方の違いか、或いは彼らが社会人を経験していないという違いによるものでしょう。寮では会社の社員とのさまざまな内容のコミュニケーションがありました。政治とか、経済とか、文化等々。そのなかで一番多かったのはやはり経済と文化でした。話をする時間は長いこともありましたし短いこともありました。けれどもお互いに満ちたりた気分になりました。

２年間という長いようで短い期間、肥後銀行徒然寮で社員の人々と共同生活をしたという経験は、私にとって一生忘れられないものであり、印象深い思い出がたくさんできました。寮の人々の優しさ、暖かさ、素朴な人情、海より深い友情に感動しました。本当に有り難く嬉しく思っています。特に寮の管理人様と寮のお母さんたちには、日本の生活習慣とか、異文化とか、日本語等をとても親切に教えていただきました。ここに心から感謝いたします。



国際交流

８年度も学外のたくさんの交流団体等からイベントのお誘いがありました。「**中国人留学生100周年友好フェスタ in 小国**」では歌やディスカッション等で楽しい時間をすごしました。

㈶熊本市国際交流振興事業団主催の「**フィールドトリップ in 熊本**」では日本舞踊、琴、そば打ちを体験。同事業団ではこのほかにも着物、書道、茶道、生け花などの日本文化体験講座を実施。多くの留学生が参加しました。

付属敬愛幼稚園のクリスマス会。ドイツからの短期留学生ジリ・コストカ君がサンタクロースにふんして登場。園児たちは大喜びでした。

天草郡御所浦町の御所浦中学校・同中 PTA 主催で**国際交流キャンプ**が行われました。無人島・黒島で、地元の中学生とキャンプを通じて交流を深めました。参加した留学生たちは、海水浴や地引き網漁などを体験。美しい自然に触れて大感激でした。

毎年８月に水俣市で行われる「**水俣国際親善競り船大会**」。県内の大学で学ぶ外国人留学生に大会出場のお誘いがありました。本学からも多くの留学生が出場、大会を大いに盛り上げました。

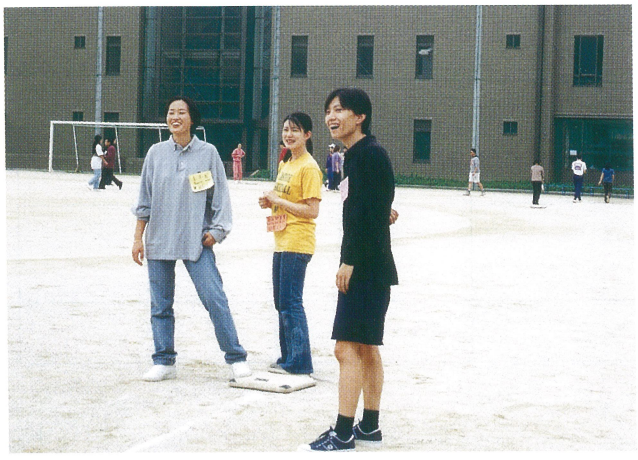
スナップ

本学学生自治会主催の「**新入生歓迎ピクニック**」。たくさんの留学生が参加。南阿蘇の大自然を満喫しました。（4月18日）

体育祭

11月1日の体育祭では留学生も各種目に出場。アメリカ、韓国、中国、ドイツからの留学生で編成されたリレー女子チームは見事な走りを見せ堂々予選第1位でテープをきりました。

本学学生議会主催の**スポーツ交流会**が11月16日に行われました。キックベースボールや懇親会を通じて本学の日本人学生と交流を深めました。



託麻祭

秋の学園祭「託麻祭」では模擬店で留学生が作るお国料理が大人気。中国チームはギョウザと肉まん、韓国チームはチヂミ（韓国のお好み焼き）とキンパプ（のり巻き）を作りました。お味のほうはもちろん大好評でした。（写真は韓国チーム）

1996年 国際交流 EVENTS

月	米国・モンタナ	韓国・大田	中国・深圳
1月	17日 井上勝子先生（MSU 交換教員）出発		
2月	1日 MSU 春期短期派遣留学生（3名）出発 2日 UM ジョージ・デニスン学長ご夫妻、ラリー・モーラン大学基金会長来学	3日 第8回大田大学校学生研修団来学（2／6離熊） 5日 第1回大田大学校学生会代表来学（2／8離熊） 15日 辛允貞さん、黄淳英さん（大田大学校長期交換留学生）帰国 16日 木下徹弘先生（大田大学校交換教員）帰国 22日 李銀娥さん（大田大学校長期交換留学生）帰国 26日 尹一鉉先生（大田大学校交換教員）帰国 26日 大塚信生先生（大田大学校交換教員）出発 26日 渡邊照男くん、横手誠くん（大田大学校長期交換留学生）出発 28日 呉應準氏（大田大学校総長）一行来熊（～3／1） 29日 崔秀芝さん（大田大学校長期交換留学生）帰国	
3月		11日 慶益秀先生（大田大学校交換教員）来学 18日 金鍾烈くん、成大永くん、李羊宿さん、都慧承さん（大田大学校長期交換留学生）来学	1日 早川愛さん、酒井理恵さん（深圳大学長期交換留学生）出発 1日 角居典枝さん（深圳大学長期交換留学生）帰国 3日 佐伯玲奈さん（深圳大学長期交換留学生）帰国 4日 高徳榮先生（深圳大学国際金融貿易学部教授）来学 23日 刘华端さん（深圳大学長期交換留学生）帰国 26日 王方先生（深圳大学交換教員）帰国 27日 刘若瑜さん（深圳大学長期交換留学生）帰国
4月	1日 MSU 春期短期派遣留学生（3名）帰国 10日 MSU 国際教育局長ノーマン・ピーターソン氏、国際教育委員長マイケル・オウエン氏、ベス・ダベンポートさん来熊（～4／13） 17日 モンタナ州商務省長官一行来学		16日 尹洁颖さん、顔尤梅さん（深圳大学長期交換留学生）来熊
5月	11日 福田俊寛くん（MSU 長期交換留学生）帰国 21日 田辺順子さん（MSU 長期交換留学生）帰国 28日 田島由里さん(キャロル大学長期交換留学生)帰国	25日 大田大学校呉應準総長一行来熊 29日 大田大学校貿易学科学生研修団来熊（6／1離熊）	
6月	12日 嶋田有利子さん（キャロル大学長期交換留学生）帰国 13日 『情報ネットワークシステム完成披露式』MSU マイケル・マローン学長、熊本学園大学岩野茂道学長とインターネット対談	4日 新図書館開館式学長訪問団出発（6／6帰熊）	6日 王宋荣氏（深圳大学副学長）一行来熊（6／9離熊）
7月	2日 キャロル大学ダニエル・シェイ神父（キャロル大学長期交換留学生）帰国 2日 MSU 研修生マイク・メイジャーくん来熊 5日 小松真樹さん（MSU 長期交換留学生）帰国 12日 ディビッド・ロビンくん（MSU 長期交換留学生）帰国 15日 アンディ・ヘルトボーグくん（MSU 長期交換留学生）帰国 29日 吉田良夫先生（MSU 交換教員）出発 31日 ケン・ギルマーくん（MSU 長期交換留学生）帰国	3日 大田大学校学生幹部来熊（7／8離熊） 10日 第2回大田大学校夏期学生研修団来学 29日 大田大学校国際交流室表昌宣さん来熊（8／1離熊）	
8月	1日 村上美沙さん（MSU 長期交換留学生）出発 3日 MSU 研修生マイク・メイジャーくん帰国 5日 井上勝子先生（MSU 交換教員）帰国 20日 出田薫さん（UM 長期交換留学生）出発 21日 永井大嗣くん（UM 長期交換留学生）出発 23日 第7回モンタナ研修サマープログラム出発 25日 吉住英治くん（MSU 長期交換留学生）出発	1日 第2回大田大学校夏期学生研修団帰国 28日 第6回大田大学校訪問学生研修団出発	
9月	3日 ハリー・オルソンさん（MSU 長期交換留学生）来熊 6日 アンディーJ．ラブリスくん（キャロル大学長期交換留学生）来熊 7日 スコット・パイカーチャクくん（MSU 長期交換留学生）来熊 7日 レイチェルM．ランセスさん（キャロル大学長期交換留学生）来熊 10日 第7回モンタナ研修サマープログラム帰国 12日 ライアン・アダムズくん（キャロル大学長期交換留学生）来学 12日 ウォーレン・ゲイル先生（MSU 交換教員）来熊 13日 ケビン・リンゲンフェルター先生（MSU 交換教員）離熊	3日 第6回大田大学校訪問学生研修団帰国	11日 第2回深圳大学訪問学生研修団出発 18日 第2回深圳大学訪問学生研修団帰国
10月		9日 大田大学校行政学科学生研修団来学（～10/12） 23日 大田大学校貿易学科学生研修団来学（～10/26）	
11月			
12月			

英国・リバプール	独国・ラインランドプファルツ	教員研修・海外ゼミ研修	その他	月
				1月
1日　リバプール・ジョン・モーズ大学春期短期派遣留学生（８名）出発	1日　ラインランド・プファルツ州立経済大学春期短期派遣留学生（４名）出発 26日　ペーター・ヴェッツラー先生（ラインランド・プファルツ州立経済大学）来熊（２／28離熊）	1～6日　勝部ゼミ　中国（上海・深圳）、香港 1～7日　中野ゼミ　香港、イギリス（ロンドン） 1～7日　小島ゼミ　イギリス（ロンドン）、フランス（パリ） 5～12日　田島ゼミ　イギリス（ロンドン）、韓国（ソウル） 5～12日　菅ゼミ　イギリス（ロンドン）、フランス（パリ） 15～22日　用稲ゼミ　イタリア（ローマ）、香港 17～21日　花谷ゼミ　オーストラリア（シドニー）※マイケル・ラッタ先生同行。 17～22日　李ゼミ　中国（北京、西安、上海） 18～25日　坂上ゼミ　イタリア（ローマ）、フランス（パリ） 18～27日　ルウィンゼミ　タイ（バンコク、チェンマイ、パタヤ） 22～26日　西ゼミ　中国（北京、ハルピン）	28日　熊本県海外技術研修生　刘庆委さん離熊	2月
17日　アンドレア・ヒューズさん（リバプール・ジョン・モーズ大学短期派遣留学生）来熊 21日　ジャクリン・モンクさん、ナターシャ・ベイリさん、（リバプール・ジョン・モーズ大学短期派遣留学生）来熊 28日　カレン・ティオさん（リバプール・ジョン・モーズ大学短期派遣留学生）来熊		2～5日　宮崎ゼミ　韓国（ソウル、大田、釜山） 6～16日　古田ゼミ　イギリス（ロンドン）、フランス（パリ）	19日　日韓文化交流基金派遣訪韓団　原口貴之くん出発（～３／28）	3月
1日　リバプール・ジョン・モーズ大学春期短期派遣留学生（８名）帰国	1日　ラインランド・プファルツ州立経済大学春期短期派遣留学生（４名）帰国		14日　ルイス　ジェイ　アグニーズ　ジュニア氏（米国・テキサス州サンアントニオ市インカーネットワード大学学長）来学 17日　甲南大学留学生研修団来学（～４／20離熊） 18日　新入生歓迎ピクニック	4月
29日　佐藤伸洋くん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）帰国			23日　六ツ石和歌子さん（熊本市派遣留学生）帰国	5月
			5日　蔡元欣さん（中国・熊本市－桂林市派遣留学生）来学 20日　外国語学部「海外研修」韓国コース出発 20日　上村朋子さん（仏国・ポワチエ大学長期派遣留学生）帰国	6月
4日　サマンサ・モーズさん、ヴァネッサ・コクショールさん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）帰国 7日　高村諭くん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）帰国 12日　有藤睦世さん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）出発 30日　アンドレア・ヒューズさん、ナターリャ・ベイリさん（リバプール・ジョン・モーズ大学短期派遣留学生）帰国 31日　ジャクリン・モンクさん（リバプール・ジョン・モーズ大学短期派遣留学生）帰国			10日　外国語学部「海外研修」中国コース出発 11日　外国語学部「海外研修」米国コース出発 12日　経済学部「外国事情研修」米国コース出発 12日　外国語学部「海外研修」英国コース出発 14日　ローラ・Y・ガルシアさん（米国テキサス州サンアントニオ市派遣留学生）帰国 15日　経済学部「外国事情研修」韓国コース出発 18日　城戸麻美さん（中国・熊本市－桂林市派遣留学生）帰国 21日　経済学部「外国事情研修」中国コース出発 31日　外国語学部「海外研修」韓国コース帰国 31日　米山悦夫先生（仏国・リヨン商科大学）来学	7月
13日　和田祥子さん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）出発 31日　カレン・ティオさん（リバプール・ジョン・モーズ大学短期派遣留学生）帰国		6日　朴哲洙先生（米国・ハーバード大学長期留学）出発※97．８．５に帰国予定 19日　マング・マング・ルウィン先生（英国・リバプールジョンモーズ大学短期留学）※97．３．１に帰国予定。	3日　'96『JALスカラシップ』訪問学生受入（～８／４） 6日　外国語学部「海外研修」中国コース帰国 8日　経済学部「外国事情研修」米国コース帰国 10日　経済学部「外国事情研修」韓国コース帰国 12日　経済学部「外国事情研修」中国コース帰国 12日　外国語学部「海外研修」米国コース帰国 12日　外国語学部「海外研修」英国コース帰国 15日　池田さやかさん（熊本市派遣留学生）出発	8月
9日　サンディア・シャーさん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）来熊 17日　ローレンス・マリーくん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）来学	6日　ジリ・コストカくん（ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生）来熊 9日　ペーター・ベラネクくん（ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生）来熊 11日　アネッテ・ディーツさん、ジルケ・ドヤリングさん（ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生）来学		6日　ルーワス・アグニーズィくん（米国・テキサス州サンアントニオ市派遣留学生）来熊 7日　ビアトリス・モレノさん（米国・テキサス州サンアントニオ市派遣留学生）来熊	9月
			7日　南加熊本県人会一行来学 12日　学生と留学生のスポーツ交流会 14日　ルイス・ジェイ・アグニーズ・ジュニア氏（米国・テキサス州サンアントニオ市インカーネットワード大学学長）来学 29日　日韓文化交流基金派遣訪韓団齋藤あかねさん出発（～11／７）	10月
			1日～4日　留学生の体育祭、託麻祭への参加 3日　『熊本国際交流祭祭典'96』パネル展示参加 30日　第６回外国人留学生弁論大会	11月
2日　王勇江先生（リバプール・ジョン・モーズ大学日本語講師）来学（12／４離熊）	20日　ペーター・ベラネクくん（ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生）帰国		11日　留学生バザー開催	12月

DATA

1996年度出身国（地域）別外国人留学生数

〔9カ国（地域）68名〕（12月1日現在）

国名または地域名	学部・学科留学生							研究留学生		大学院生				交換留学生	合計
	大学				短大部		合計								
	1	2	3	4	1	2		大	合計	1	2	3	合計		
中国	2	5	8	4			19名	7	7名	5	6		11名	3名	40名
台湾				1			1名			1	1		2名		3名
韓国								2	2名			1	1名	4名	7名
インド								1	1名						1名
イギリス														2名	2名
アメリカ														7名	7名
ドイツ														4名	4名
ブラジル								2	2名						2名
ペルー								1	1名						1名
合計	2	5	8	5	0	0	20名	13	13名	6	7	1	14名	20名	67名

1996年度　留学生名簿

1．学部留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	郭学雷（カクガクライ）	男性	中国	商学部・商学科1年
2	刘志峰（リュウシホウ）	男性	中国	経済学部・国際経済学科1年
3	呉琼（ゴジョン）	女性	中国	商学部・商学科2年
4	趙英偉（チョウエイイ）	男性	中国	商学部・商学科2年
5	李奕茜（リエキセン）	女性	中国	商学部・経営学科2年
6	馬秋紅（マチュウホン）	女性	中国	商学部・経営学科2年
7	程菱（テイリョウ）	女性	中国	経済学部・経済学科2年
8	何兆斌（カチョウヒン）	男性	中国	商学部・商学科3年
9	顧建勲（コケンクン）	男性	中国	商学部・商学科3年
10	劉凱玲（リュウガイレイ）	女性	中国	商学部・商学科3年
11	呉霄宇（ゴショウウ）	男性	中国	商学部・経営学科3年
12	李競（リキョウ）	男性	中国	商学部・経営学科3年
13	張衛琼（チョウエイケイ）	女性	中国	経済学部・経済学科3年
14	黄益培（コーエキバイ）	男性	中国	経済学部・国際経済学科3年
15	任佳（ニンケイ）	女性	中国	経済学部・国際経済学科3年
16	邱鴻淳（キュウコウジュン）	男性	台湾	商学部・経営学科4年
17	楊軍（ヨウグン）	女性	中国	商学部・経営学科4年
18	何成雨（カセイウ）	男性	中国	経済学科・国際経済学科4年
19	姚嶸（ヨウリキ）	男性	中国	商学部・商学科4年
20	李剛剛（リコウゴウ）	男性	中国	商学部・経営学科4年

2．学部研究留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	日下野成次（クサカノ セイジ）	男性	ブラジル	商学部・商学科
2	徐蒙（ジョモウ）	女性	中国	商学部・経営学科
3	呉昊（ゴコウ）	男性	中国	商学部・経営学科
4	張赫磊（チョウカクライ）	男性	中国	商学部・経営学科
5	AASHISHI MISHR（アッシシ・ミシュラ）	男性	インド	商学部・経営学科
6	徐麗紅（ジョレイコウ）	女性	中国	商学部・経営学科
7	稗田幸江エリカ（ヒエダ サチエ）	女性	ブラジル	商学部・経営学科
8	林田宮内ビラル（ハヤシダ ミヤウチ）	女性	ペルー	商学部・経営学科
9	郭夢鉉（カクムゲン）	女性	中国	経済学部・経済学科
10	霍莉莉（カクリリ）	女性	中国	経済学部・経済学科
11	朴珍姫（パクジンヒ）	女性	韓国	経済学部・国際経済学科
12	李守陳（イスウチン）	女性	韓国	社会福祉学部・社会福祉学科
13	潘丹敏（ハンタンビン）	女性	中国	社会福祉学部・社会福祉学科

3．大学院生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	嚴笑麗（ゲンショウレイ）	女性	中国	院・商学研究科1年
2	殷紅（インコウ）	女性	中国	院・経営学研究科1年
3	宋玮（ソウイ）	男性	中国	院・経営学研究科1年
4	潘丹慧（ハンタンケイ）	女性	中国	院・経営学研究科1年
5	陳瑞君（チェンルイジン）	女性	台湾	院・経済学研究科1年
6	刘毅（リュウイ）	男性	中国	院・経済学研究科1年
7	李勤（リキン）	男性	中国	院・商学研究科2年
8	王念海（オウネンカイ）	男性	中国	院・経済学研究科2年
9	金春奉（キンシュンホウ）	男性	中国	院・経営学研究科2年
10	文勝龍（ブンショウリュウ）	男性	中国	院・経済学研究科2年
11	曲家岩（キョクカガン）	男性	中国	院・経済学研究科2年
12	陳宏孟（チンコウモ）	男性	台湾	院・経済学研究科2年
13	方志华（ホウシカ）	男性	中国	院・経済学研究科2年
14	韓相倫（ハンサンユン）	男性	韓国	院・商学研究科3年

4．交換留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	成大永（ソンデヨン）	男性	韓国	外国語学部・東アジア学科2年
2	金鐘烈（キムジョンヨル）	男性	韓国	商学部・商学科4年
3	李羊宿（イヤンスック）	女性	韓国	外国語学部・東アジア学科2年
4	都慧承（トヘスン）	女性	韓国	商学部・経営学科3年
5	顔尤梅（イエンロンメイ）	女性	中国	経済学部・国際経済学科3年
6	尹洁颖（インジェイン）	女性	中国	経済学部・国際経済学科3年
7	Holly Olson（ハリー オルソン）	女性	アメリカ	経済学部・国際経済学科4年
8	Scott Piekarczyk（スコット パイカーチャク）	男性	アメリカ	経済学部・国際経済学科3年
9	Rachael M.Langseth（レイチェル M.ランセス）	女性	アメリカ	経済学部・国際経済学科3年
10	Andrew J.Loveless（アンドリュー J.ラブレス）	男性	アメリカ	経済学部・国際経済学科3年
11	Ryan Adams（ライアン アダムズ）	男性	アメリカ	経済学部・国際経済学科3年
12	Sandhya Shah（サンディア シャ）	女性	イギリス	経済学部・国際経済学科3年
13	Laurence Murray（ローレンス マリー）	男性	イギリス	経済学部・国際経済学科3年
14	Silke Deuerling（ジルケ ドヤリング）	女性	ドイツ	経済学部・国際経済学科3年
15	Annette Diez（アネッテ ディーツ）	女性	ドイツ	経済学部・国際経済学科3年
16	Peter Beraned（ペーター ベラネク）	男性	ドイツ	経済学部・国際経済学科3年
17	Jiri Kostka（ジリ コトスカ）	男性	ドイツ	経済学部・国際経済学科3年

5．サンアントニオ市派遣留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	Louis Agnese（ルーウス アグニーズィ）	男性	アメリカ	経済学部・国際経済学科 科目等履修生
2	Beatrice Moreno（ビアトリス モレノ）	女性	アメリカ	経済学部・国際経済学部 科目等履修生

6．桂林市派遣留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	蔡元欣（サイゲンキン）	女性	中国	商学部・経営学科 科目等履修生

本学留学生への交流の主な案内（1996年度）

名　称	主　催	内　容	期　日	備　考
留学生の会	熊本 YWCA	日本の家庭紹介 各自行事への案内	年間を通じ随時入会申込み受付	
新入生歓迎ピクニック	熊本学園大学第一部学生自治会	新入生歓迎の大学行事	4／18	多数参加
留学生交流会	熊本江南ローターアクト	スポーツとディスカッションゲーム	5／19	16名参加
留学生との交流会	城南町フレンドシップクラブ	交流会	5／25	13名参加
日本文化体験講座	(財)熊本市国際交流振興事業団	着付け、書道、茶道の体験講座	6／8、15、22	多数参加
JAPAN　TENT 世界留学生交流いしかわ	JAPAN　TENT 開催委員会	県民、地元学生との交流、ホームステイ	8／1～8／8	1名参加
水俣国際親善競り舟大会	熊本県水俣市	市民との親善交流ホームステイ	8／3～8／5	13名参加
御所浦町国際交流キャンプ	御所浦中学校	地元中学校との交流、キャンプ	8／9～8／10	12名参加
北海道・国際交流のつどい	北海道国際交流センター	ホームステイ、地域交流、学校交流	8／17～9／1	3名参加
火の国まつり	熊本市	おてもやん総踊り出場	8／12	8名参加
王立カンボジア舞踊団熊本巡回公演	国際文化交流を進める会	公演への招待	9／24	24名参加
中国人留学100周年記念友好フェスタ	小国留学生後援会 熊本県日中協会	教育・文化・スポーツ・交流	10／6	5名参加
外国人留学生と郵便友の会との交流会	熊本東郵便局	国際文通の講習会	10／12	
留学生とのスポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学学生とのゲーム形式のスポーツ交流	10／12	30名参加
フィールドトリップ IN くまもと	(財)熊本市国際交流振興事業団	日本文化体験（琴、日舞、そば打ち）	10／19	22名参加
俳画教室	熊本市総合女性センター	俳画	10／20	9名参加
第9回全国子守歌フェスタ	マインド 五木村	世界の子守歌を披露	11／3	5名参加
国際理解教育等の活動	西原小学校	自国の文化、習慣、言葉等の紹介	11／7	1名参加
夏目漱石杯英語スピーチコンテスト	96熊本漱石博推進100人委員会など	漱石に関するパフォーマンス発表	11／10	4名参加
第3回チャリティー愛のコンサート	国際文化交流を進める会	コンサートへの招待	11／14	13名参加
日本文化体験講座	(財)熊本市国際交流振興事業団	おりがみ、書道、生け花、琴など	11／16、23、30	多数参加
熊本市民中国語講座講師会学習会	熊本市民中国語講座講師会	学習会の講師	11／17	1名参加
若手経営者との交流会	くまもと21の会	郷土料理披露と交流会	12／5	5名参加
夜はバラエティーへの出演	RKK ラジオ	弁論大会受賞者へのインタビューとトーク	12／11	3名参加
年末パーティー	城南町フレンドシップクラブ	懇談会・夕食会	12／14	7名参加
イヤーエンドパーティー	(財)熊本市国際交流振興事業団	年末パーティー交流	12／20	10名参加
「第九」演奏会への招待	熊本県銀行協会	演奏会への招待	12／23	45名参加
新制作座フェスティバル	国際文化交流を進める会と新制作座		12／24	20名参加
年末年始交通事故防止運動	熊本東地区安全運転管理者等協議会	餅つき　交通事故防止キャンペーン参加	12／24	5名参加
熊本ワールド90への出演	熊本シティー FM 熊本市国際交流振興事業団	ラジオ番組での故郷紹介など	1／2	10名参加
消防出初式	熊本市消防局	伝統的消防出初式の見学	1／1	
食文化交流	熊本県つばさの会	郷土料理の紹介と交流会	2／1	3名参加
第15回春節祝賀会	熊本県日中協会		2／12	15名参加
在熊外国人激励会	南ローターリークラブ	ロータリークラブの会員との交流会	2／24	多数参加
中国映画上映会	熊本県日中友好協会青年部	年間4回の中国映画を無料で上映		多数参加
第24回ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	ユネスコ会員と共に文化財を見学	3／16	8名参加

DATA

1996年度・本学留学生の奨学金受給実績

★各種奨学金受給者数の合計

学部学生　21
大学院生　13
学部研究留学生　8
合計42名

（重複受給者と前年度からの継続受給者を含む実員）

★本学で扱った奨学金の受給状況

私費外国人留学生学習奨励費　（一般奨励費）

	推　薦	採　用
学部留学生	6	5
大学院生	2	2

熊本県外国人留学生奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	7	5
大学院生	2	2
学部研究留学生	4	2

在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	5	2
大学院生	3	0
学部研究留学生	5	4

肥後銀行国際交流奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	6	2
大学院生	2	0

平和中島財団外国人留学生奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	3	0
大学院生	7	0

私費外国人留学生平和友好特別奨励費（特別奨励費）

	推　薦	採　用
学部留学生	5	5
大学院生	3	3

ロータリー壽崎奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	7	2
大学院生	4	3
学部研究留学生	2	1

ロータリー米山記念奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	0	0
大学院生	7	1

国内採用による国費外国人留学生

	推　薦	採　用
学部留学生	0	0
大学院生	3	2

壽崎育英財団奨学金

	推　薦	採　用
学部留学生	4	0
大学院生	2	0
学部研究留学生	2	1

国際交流センター事務室主催　交換教員による教職員向け語学講座

韓国語会話クラス　講　師：慶　益　秀先生（韓国・大田大学校）
開催日：1996年４月25日から1997年１月13日まで〔原則として月曜日〕
時　間：17：50～18：50

英会話クラス（１）　講　師：ケビン・リンゲンフェルター先生（米国・モンタナ州立大学）
開催日：1996年４月25日から1996年７月11日まで〔原則として木曜日〕
時　間：17：30～18：30

英会話クラス（２）　講　師：ウォーレン・ゲイル先生（米国・モンタナ州立大学）
開催日：1996年９月26日から1996年12月19日まで〔原則として木曜日〕
時　間：17：30～18：30

国際交流委員会メンバー

（敬称略）

1996年３月まで
国際交流委員長　勝部伸夫
国際交流委員
商学部　蔡剣波、マイケル・ラッタ（'96.3まで）
吉永心一（'96.4～）
経済学部　原口行雄、馮蘊澤
外国語学部　西　紀昭、林　日出男
社会福祉学部　篠崎正美、田中節男
短期大学部　田中　均、藤田誠司（'96.3まで）
大塚信生（'96.4～）
国際交流センター事務室
星子三郎、喜佐田知子

国際交流センター事務室スタッフ

室長　星子三郎
喜佐田知子、切通しのぶ、西村明博、川邊裕佳、園田菜里、野田光、直江美子

熊本学園大学
KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY
〒862　熊本市大江２丁目５番１号
TEL.096-364-5161

国際交流レター　Vol.19
平成９年５月発行
発行者　熊本学園大学国際交流委員会
熊本市大江２丁目５番１号
電話　(096)366-3230